

上長谷遺跡



1995.3

宮崎県西諸県郡須木村教育委員会

序

日頃より埋蔵文化財の保護、活用に関しては深いご理解とご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。

さて、須木村教育委員会では須木村の依頼を受けて、「し尿処理場」建設予定地である下田に所在する上長谷遺跡の発掘調査を行いました。

調査では、縄文時代の土器片、石鏃、住居跡等が検出され、大きな成果を上げることができました。

このような調査の成果をまとめた本報告書が学術資料として、また、学校教育や生涯学習の資料として、郷土理解の一助となることを期待いたします。

試掘調査から本調査に至るまで種々ご指導いただきました宮崎県教育委員会文化課をはじめ、発掘調査作業にご協力いただいた方々に厚く感謝を申し上げ刊行の言葉といたします。

平成7年3月

須木村教育委員会

教育長 西道三男

凡　　例

1. 本書は、須木村し原処理場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本報告書で使用した遺構の実測図は、吉本正典・橋本英俊による。
3. 本報告書で使用した写真は、上空からの全景については業者に委託し、その他については吉本の撮影による。
4. 遺物・図面の整理は、宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターで行ない、遺物の実測、拓本および計測などの作業は、吉本・橋本と整理補助員が行った。
5. 土器については、特に小破片を中心に傾き、上下を明確にしえない個体が存在する。「土器観察所見」には、出土区、層、色調〔外面／内面〕、調整〔外面／内面（　）内は文様〕、胎土中の混入物の順で記載している。胎土中の混入物の鉱物名は、肉眼観察による判断で、必ずしも正確でない。
6. 石器の「石器石材・重量」には、出土区、層、石材、重量の順で記載している。石材同定は、これも肉眼観察による判断である。
7. 遺物整理段階において、戸高眞知子（宮崎県教育庁文化課）氏の御協力を得た。
8. 本報告書中に掲げた地形図（第1章第1図）は、国土地理院発行の5万分の1地形図「須木」を使用している。
9. 本報告書中の方位は、地形図のそれを除いて全て磁北である。
10. 本報告書中の土色の表記および土器の色調は、小山正忠・竹原秀夫編・著『新版標準土色帖』に拠った。
11. 本書の編集は吉本が行った。
12. 本書の執筆は、第1章第1節を椎屋芳樹が、それ以外は吉本が行った。
13. 遺物や各種の記録は須木村教育委員会で保管している。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに	1
第1節　調査に至る経緯	1
第2節　調査の組織	1
第3節　遺跡の位置と環境	1
第Ⅱ章　調査の記録	3
第1節　調査区の設定と層序	3
第2節　縄文時代の遺構	5
(1) 積穴住居跡	5
(2) 土坑	7
(3) 小穴	7
(4) 集石遺構	7
第3節　縄文時代の遺物	15
(1) 土器	15
(2) 石器	36
第4節　遺物の出土位置	43
第Ⅲ章　まとめ	45
報告書抄録	48
図版	49

挿図目次

Fig. 1 遺跡の位置と周辺遺跡	2	Fig. 22 縄文土器実測図(8)	24
Fig. 2 遺跡周辺地形図(1/1000)	4	Fig. 23 縄文土器実測図(9)	25
Fig. 3 B-C区南西壁層位断面図(1/60)	5	Fig. 24 縄文土器実測図(10)	26
Fig. 4 遺構分布図(1/250)	6	Fig. 25 縄文土器実測図(11)	27
Fig. 5 1号堅穴住居跡実測図(1/50)	8	Fig. 26 縄文土器実測図(12)	28
Fig. 6 1号堅穴住居跡出土土器 実測図(1/3)	8	Fig. 27 縄文土器実測図(13)	29
Fig. 7 土坑実測図(1/25)	9	Fig. 28 縄文土器実測図(14)	30
Fig. 8 土坑・小穴実測図(1/25)	10	Fig. 29 縄文土器実測図(15)	31
Fig. 9 土坑出土土器実測図(1/3)	11	Fig. 30 縄文土器実測図(16)	32
Fig. 10 集石実測図(1)(1/25)	12	Fig. 31 包含層出土土器の出土位置 (2)(1/400 1/100)	33
Fig. 11 集石実測図(2)(1/25)	13	Fig. 32 縄文土器実測図(17)	34
Fig. 12 集石実測図(3)(1/25)	14	Fig. 33 縄文土器実測図(18)	35
Fig. 13 集石付近出土実測図(1/25)	14	Fig. 34 石器実測図(1)	37
Fig. 14 縄文土器実測図(1)	16	Fig. 35 石器実測図(2)	38
Fig. 15 縄文土器実測図(2)	17	Fig. 36 石器実測図(3)	39
Fig. 16 縄文土器実測図(3)	18	Fig. 37 石器実測図(4)	40
Fig. 17 縄文土器実測図(4)	19	Fig. 38 石器実測図(5)	41
Fig. 18 縄文土器実測図(5)	20	Fig. 39 石器実測図(6)	42
Fig. 19 包含層出土土器の出土位置 (1)(1/400 1/100)	21	Fig. 40 石器実測図(7)	43
Fig. 20 縄文土器実測図(6)	22	Fig. 41 包含層出土土器の出土位置 (3)(1/400 1/100)	44
Fig. 21 縄文土器実測図(7)	23		

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

須木村では平成4年度に須木村大字下田上長谷地区にし尿処理場を建設する計画があり、担当課である住民福祉課から建設予定地における埋蔵文化財の所在の有無について、平成4年2月に村教育委員会に照会があった。

それを受け、村教育委員会では建設予定地での表面採集を実施し、土器片数点を確認した。そのため、遺跡の内容を知るための試掘調査が必要となり、平成4年3月6日に実施した。試掘調査の結果土器片、黒曜石等を多数確認したため、本調査を実施することになった。現場での発掘調査は宮崎県教育委員会文化課の職員が担当した。

第2節 調査の組織

発掘調査の組織は以下の通りである。

調査主体 須木村教育委員会

教育長 西道三男
教育総務課長 岩下武史
生涯教育課主幹 佐野晃一
生涯教育課係長 椎屋芳樹
生涯教育課主事 真崎勝男
調査補助 横本英俊

調査員 宮崎県教育庁文化課

埋蔵文化財係主事 吉本正典

第3節 遺跡の位置と環境

上長谷遺跡は宮崎県西諸県郡須木村大字下田字上長谷に所在する。古くは「うえちょだに」と呼ばれており、「長」のところは「猪」の字を充てていたということを地元のかたから伺った。実際、猪が近くの山野に多く棲息しており、当地の名産品の一つとなっている。

遺跡は綾南川（本庄川）に流入する小谷の右岸（東川）の、なだらかな傾斜を示す小段丘上に立地する。標高は約400mである。

須木村内では現在までに、試掘調査を含めて8遺跡で発掘調査が行われており、その数は多いとはいえないものの重要な資料が得られている。ここでは本遺跡に関連の深い縄文時代の遺跡について簡単に紹介しておく。

九州山中の谷底低地に立地する田代ヶ八重遺跡は、本遺跡と立地条件が似通っており、また主体をなす縄文時代後期の遺物に混じって前期・中期の遺物も出土していることから、資料の対比をさせるのに良好な遺跡と言えよう。鬼界アカホヤ火山灰の土壤化層から轟B式や曾畠式、轟C・D式、尾田式、深



- 1 上長谷遺跡 2 田代ヶ八重遺跡(田代八重遺跡) 3 上床遺跡(上床第1遺跡)
 4 上の原地下水式横穴群 5 大年谷遺跡 6 尾殿遺跡(尾殿第1・第2・第3遺跡)
 7 須木城跡 8 蓬上原遺跡

Fig. 1 遺跡の位置と周辺遺跡

浦式、春日式、外来系の船元式（IV式か）などの土器が出土している。

現在、須木小学校が建っている台地一帯は尾殿遺跡と呼ばれ、縄文時代後期末から晩期前半の黒色磨研系の土器が、西北諸県過疎地域教育センターの建設工事の際に出土している。また古墳時代の土師器も出土しており、そのうちの一つの完形の壺は村指定の文化財になっている。

その後、須木村教育委員会が西北諸県過疎地域教育センター周辺の試掘調査を行った際にも、縄文時代や古墳時代の所産とみられる堅穴住居跡やピット群が検出されている。

大年嶽の南東山麓の緩斜面に立地する大年谷遺跡では、鬼界アカホヤ火山灰層の下位で縄文時代早期の文化層が確認されている。遺構としては集石遺構が4基、遺物は貝殻文円筒土器や押型文系土器、多量に上る石器などが認められた。また古墳時代の堅穴住居跡も1基検出されている。

大年谷遺跡の北北西、大年嶽の西側山麓の小台地上に立地する上床遺跡では、宮崎大学の藤原宏志氏や熊本大学の甲元真之氏らによる、焼畑農耕史の究明を目的とした学術発掘調査が行われた。学術発掘ということもあり掘り下げ面積は小さいものであったが、縄文時代後期の遺物包含層を確認している。一方、プラントオパールの調査では縄文時代後期～弥生時代の栽培作物は検出されていない。

（文献）

1. 岩永哲夫・菅付和樹 1994 「須木村史」
2. 宮崎県教育委員会 1992 「田代ヶ八重遺跡」
3. 須木村教育委員会 1992 「大年谷遺跡」
4. 焼畑農耕史研究会 1984 「西諸県郡須木村上床遺跡の調査」『宮崎考古』宮崎考古学

第Ⅱ章 調査の記録

第1節 調査区の設定と層序 (Fig. 2・3)

調査に際しては、まず重機を使用して調査対象地域内の表土（耕作土）を除去し、地形に合わせて任意の主軸の10mグリッドを組んでいった。そして、北東から南西に向かって1・2・3…区、南東から北西に向かってA・B・C区と称し、地区的表示はそれらの組み合わせにより行うこととした。3区と4区の区境には、土層確認のためのセクションベルトを残している。

Fig. 3の層位図はそのセクションベルトでの記録である。それによれば、南東（A区）側の方がより標高が高く、北西（C区）側に向かって緩やかに下がっていくことや、IV層としたアカホヤ（鬼界アカホヤ火山灰層）が調査区内の全域に堆積していることがわかる。基本層序は以下の通りである。

第I層 表土・現耕作土。草木根を多く含む。基本的に暗褐色を呈するが、混入物が多く、色調は必ずしも一定でない。

第II層 黒色土。やわらかい。近世の陶磁器を含む。

第III層

（Ⅲa）黄褐色土。粘性小。縄文時代の遺物を含む。

（Ⅲb）明黄褐色土。やはり縄文時代の遺物包含層である。Ⅲa層より赤（橙色）味が強い。高位の南東（A区）側では消滅しているか、IV層の上部に薄く「しみ」状に見られる程度である。

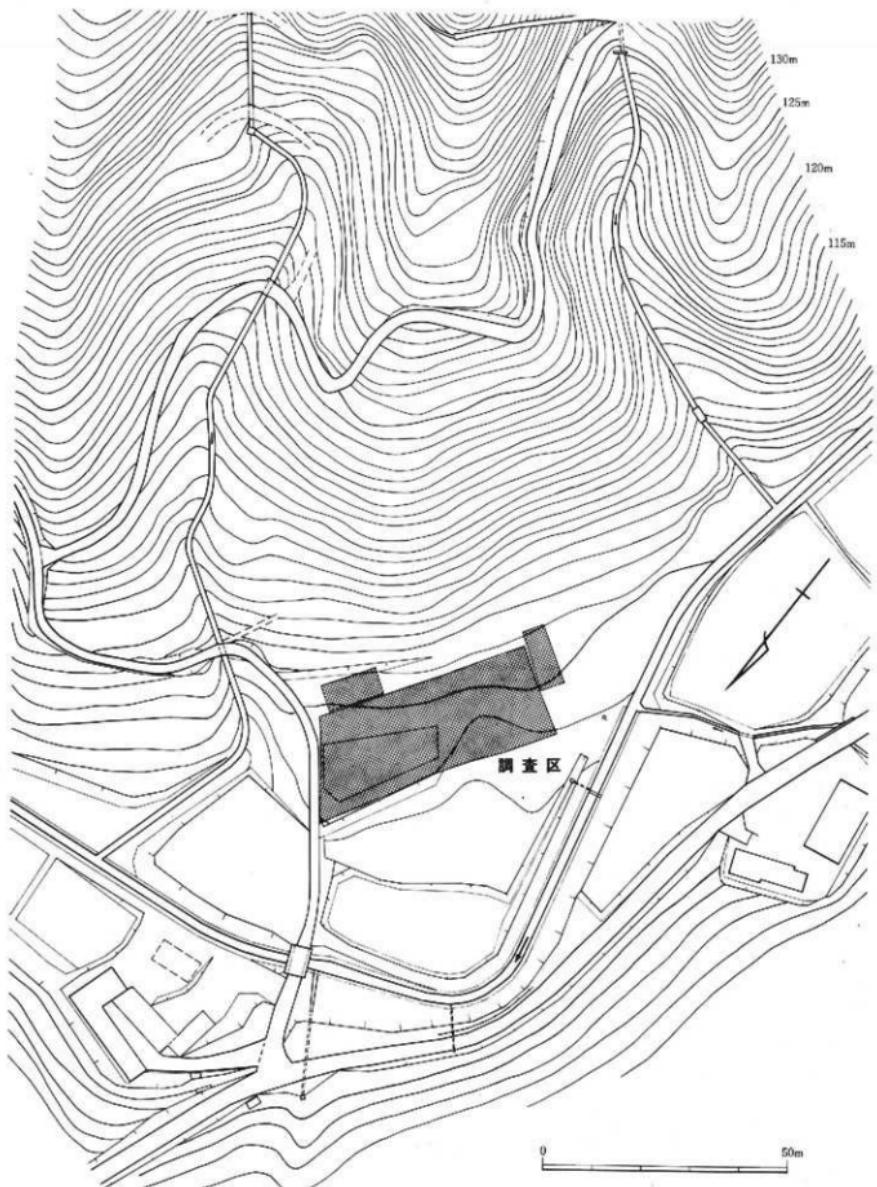


Fig. 2 遺跡周辺地形図 (1/1000)

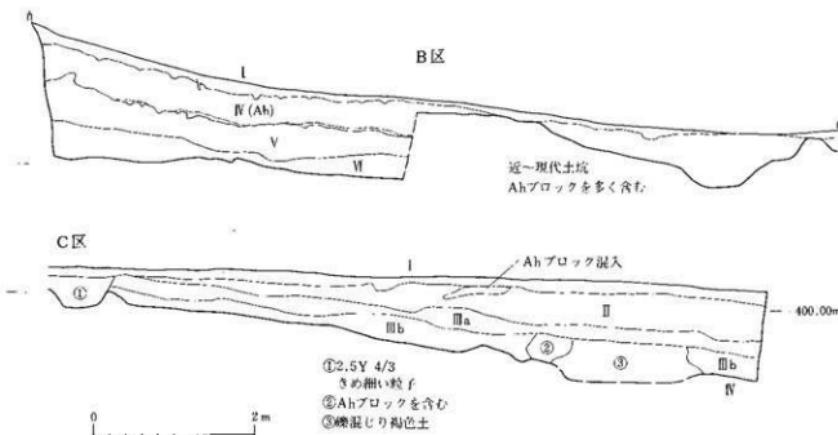


Fig. 3 B・C区南西壁断面図 (1/60)

III a層との層界は不明瞭で、遺物の取り上げの際、平面的な観察では出土層の判別・特定は困難であった。

このIII層土は、IV層とした鬼界アカホヤ火山灰層の再堆積層と考えられる。III b層は、後述するが、ほぼ縄文時代前期・中期遺物のみを包含するようである。

第IV層 鬼界アカホヤ火山灰層。約6,300年B.P.前後の年代が与えられている。黄橙色を呈し、かたくしまる。下部にはところどころに、粒の大きい火山軽石が堆積している。

第V層 明灰黃褐色土。かたい。特に上部は灰色味が強く、牛の脛ロームと呼ばれる霧島系火山噴出物に近い色調となっている。

このV層以下については土層確認のトレンチ部分のみしか掘り下げを成し得なかつたが、それでも第V層の下部で石巻が1点出土している。

第VI層 灰黒褐色土。第V層よりやや黒みが強い。かたい。

第VII層 黄褐色土で、礫を多く含む。下部は純疊層に続く。

主たる包含層はIII層で、縄文時代前期～後期が遺跡の時期的中心であり、竪穴住居跡1基、土坑3基（うち2基は陥落穴と考えられる）、小穴2基などの遺構が検出されている。土器は前期轟B式、轟C・D式などの沈線文系、連点文系、中期の春日式系、後期の西平式系など、多様な型式の出土が認められる。また、密度は低いと推測されるものの、縄文時代早期の文化層も存在していたようである。

第2節 縄文時代の遺構

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡

B-4・5区で検出された。東側の一辺は明瞭に検出できたが、西側は削平により立ち上がりが消失している。おそらく長方形の平面プランを呈するものであろう。東側の一辺長は約4mである。

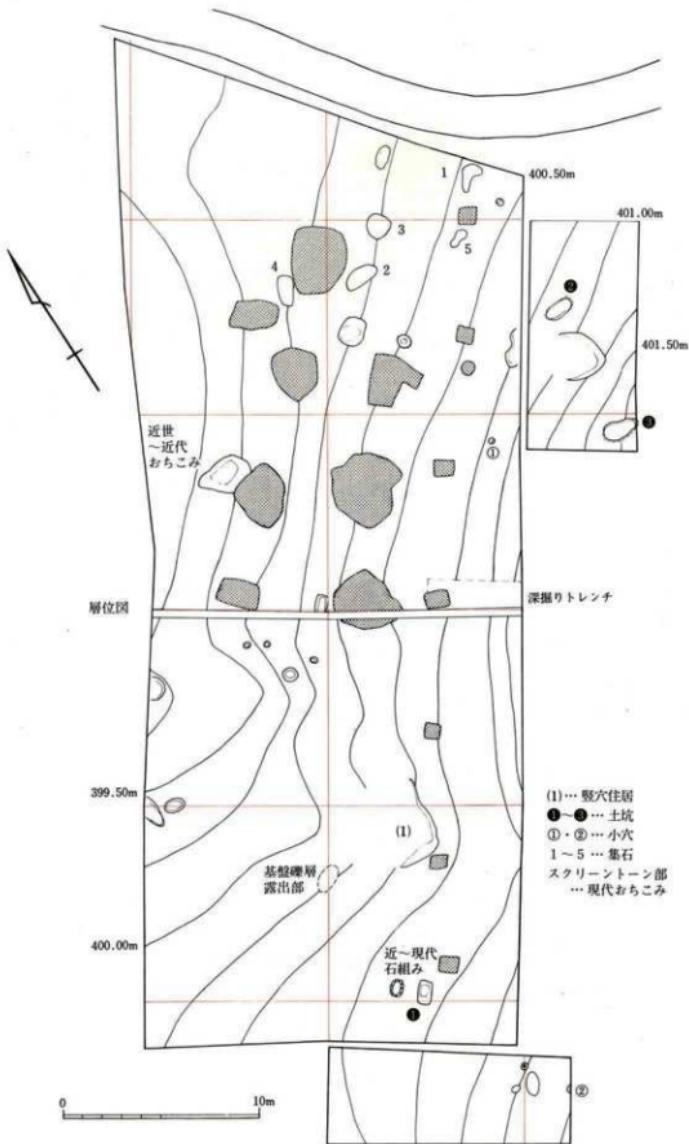


Fig. 4 造構分布図 (1/250)

主柱穴は略南北方向に並ぶ2基が該当するのであろう。床面の中央部やや南側には炭化物の集積箇所が存在し、炭化物の詰まったPitも見られた。床面下は層位横転の部分にあたり、遺構の西側では基盤層のⅦ層が露出していた。

覆土は、基本的にはⅢa層に似たにぶい黄褐色土である。覆土出土の遺物はさほど多くなかったが床面のほぼ直上の位置より比較的まとまる2個体分の土器片が出土している(1・2)。扁平な碟や剥片も認められた。

出土土器は1・2ともに内外面に地文のナデ痕や貝殻条痕が見られるだけの無文のもので、口縁部は波状になる。2は頂部の口唇部に刻みを施している。

(2) 土坑

1号土坑

B-5・6区で検出された方形プランの土坑である。平面規模は1.2m×1.0m、検出面からの深さは0.5m。繩文時代前期以降の所産と考えられるが、遺物は少なく、詳細は不明。

2号土坑

A-2区検出。検出面での平面規模は、1.55m×0.9m、検出面からの深さは0.95mを測る。長軸方向はE-Wを示す。南側や西側では、床面よりも20cm~30cm程上のあたりの径が最大となる。床面から平面規模0.38m×0.18m、より深い方の「主穴」部の深さ0.45m、「副穴」部の深さ0.3mの細長い平面形のPitが掘り込まれており、中にはV層~Ⅶ層土起源の大きなブロックを多数含む埋土が詰まっていた。杭痕は確認できなかった。この遺構は、類例から判断すると、いわゆる陥し穴であったと考えられる。

遺物は、検出面近くのレベルより繩文時代中期に属する土器片が若干数出土している(3~8)が、まとまるものではなく、この遺構の構築・使用年代決定の決め手となりえるのかどうか、疑わしい。

3号土坑

A-3区検出。これも2号土坑同様、陥し穴遺構と見られる。平面規模は検出面で1.55m×0.85m、検出面からの深さは0.9m、長軸の方向はE-Wを示す。東側と西側、特に東側は顕著なフラスコ状の断面形となっている。床面検出Pitは0.38m×0.12m、最深部の深さ0.6mで、V層~Ⅶ層土起源の大きなブロックを多数含む埋土が詰まっている。杭痕は不明瞭。

遺物は、2号土坑と同じく、検出面近くのレベルより繩文時代中期に属する土器片が多数出土している(9~11)が、やはりまとまるものはない。尚、2、3号とも検出面はⅣ層上面である。

(3) 小穴

1号小穴

B-3区で検出している。径は0.5m、検出面からの深さは0.65m。やや斜めに掘られている。

2号小穴

A-6区の調査区端で検出しており、完掘していない。径は0.5m程度か。検出面からの深さは0.3m。覆土中より土器片や碟が出土している。

(4) 集石遺構

1号集石

B-1区のⅣ層直上で検出している。後世の攪乱により相当数の礫が取り除かれていると見られる。現存部分の長軸は1.5m。

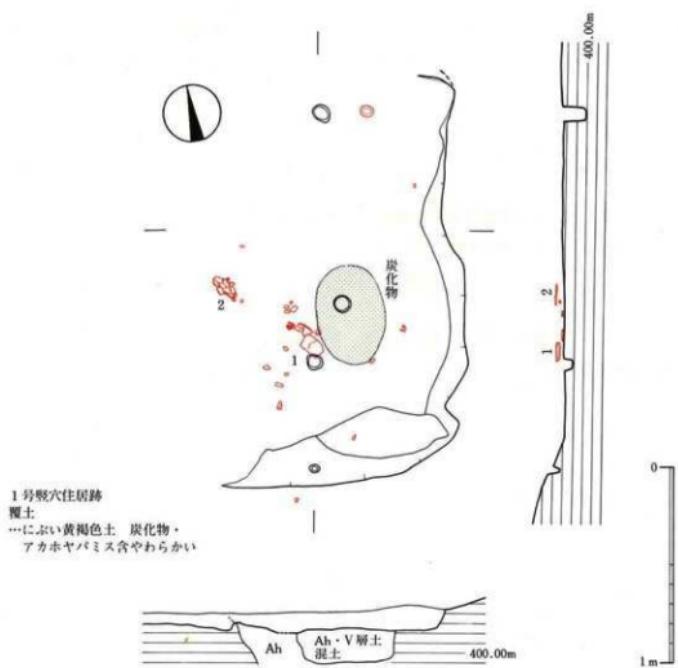


Fig. 5 1号竪穴住居跡実測図 (1/50)

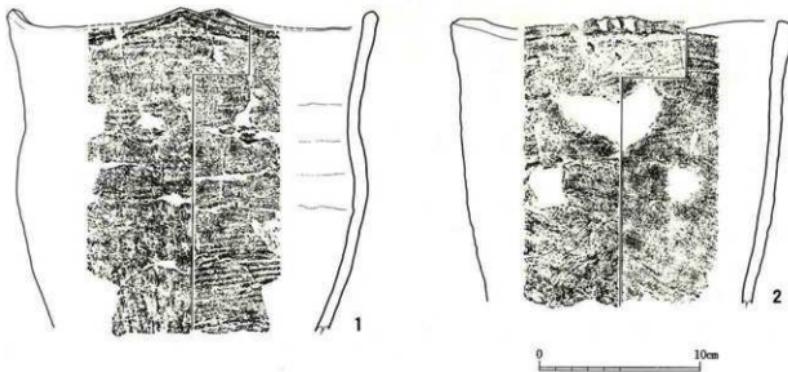


Fig. 6 1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

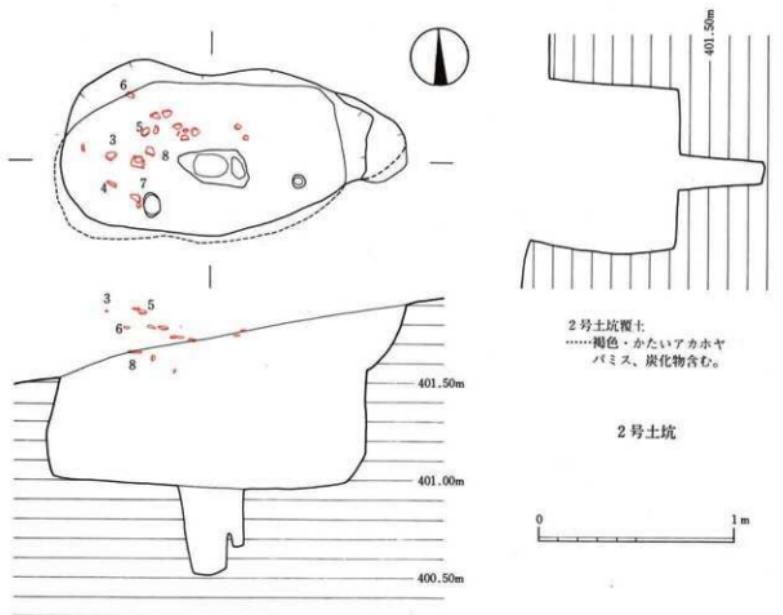
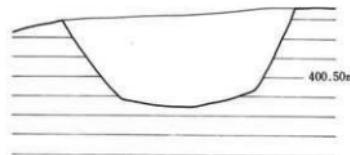
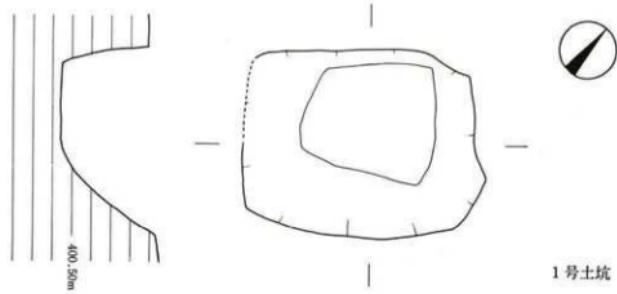


Fig. 7 土坑実測図 (1/25)

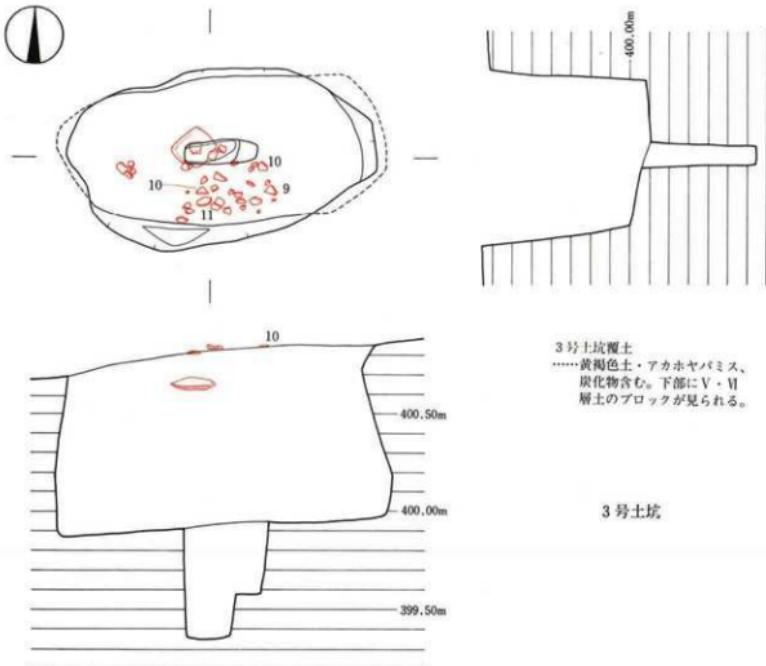


Fig. 8 土坑・小穴実測図 (1/25)

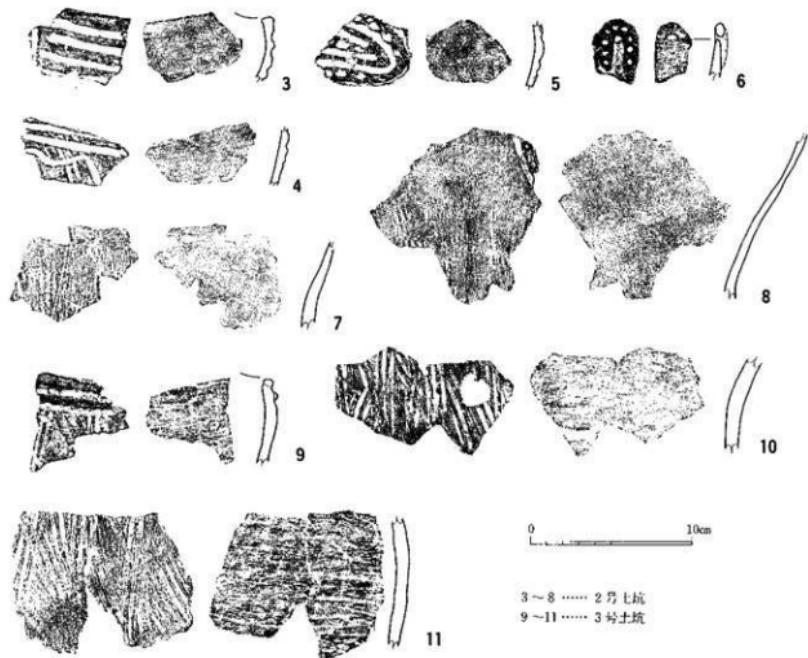


Fig. 9 土坑出土土器実測図 (1/3)

土器観察所見

- 淡黄／淡黄、黄灰 貝殻条痕（不明瞭）・ナデ／貝殻条痕 赤褐色粒 2. 黄橙 粗いナデ／貝殻条痕 3. にぶい黄橙・にぶい橙 ナデ（沈線文）／ナデ 乳白色粒・雲母 4. 黄灰／浅黄 ナデ（沈線文）／ナデ 乳白色粒・雲母 胎土3に似る 5. にぶい黄橙 ナデ（沈線文・凸点文）／ナデ 乳白色・雲母 胎土3に似る 6. 浅黄橙・にぶい橙 ナデ（竹音文）乳白色粒 7. にぶい橙／浅黄橙 条痕／ナデ 雲母胎土7に似る 9. 明黄褐 条痕（突帯）／ナデ 乳白色粒・赤褐色粒 10. 黄橙 条痕／ナデ 雲母胎土10に似る 12. にぶい橙 条痕 乳白色粒・赤褐色粒 13. 橙／黄褐 条痕 乳白色粒 褐色粒 14. 淡黄 ナデ（突帯） 角閃石

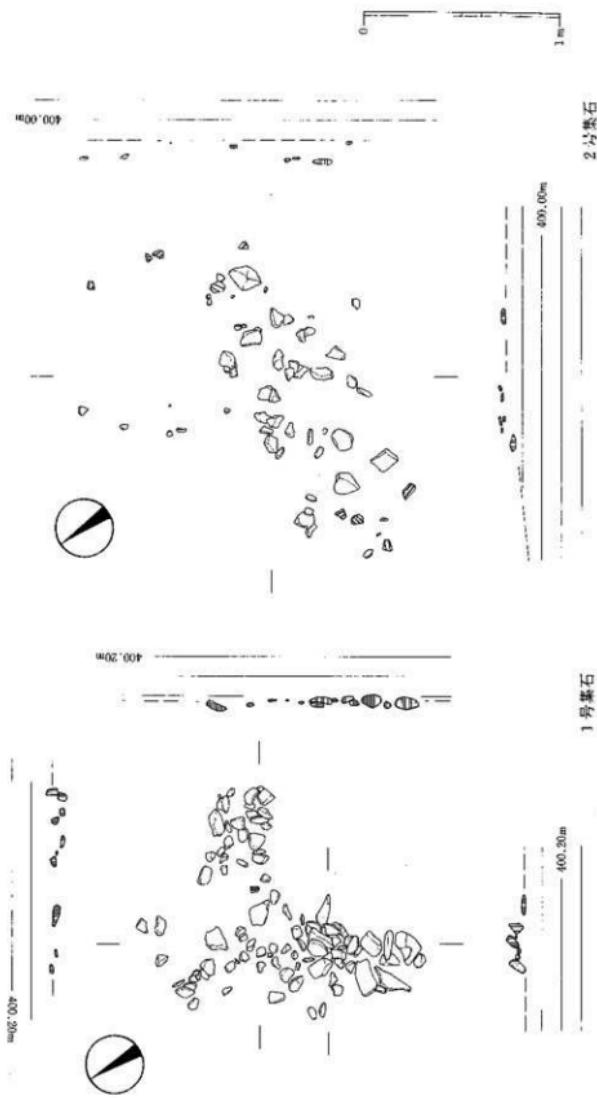


Fig.10 集石実測図(1) (1/25)

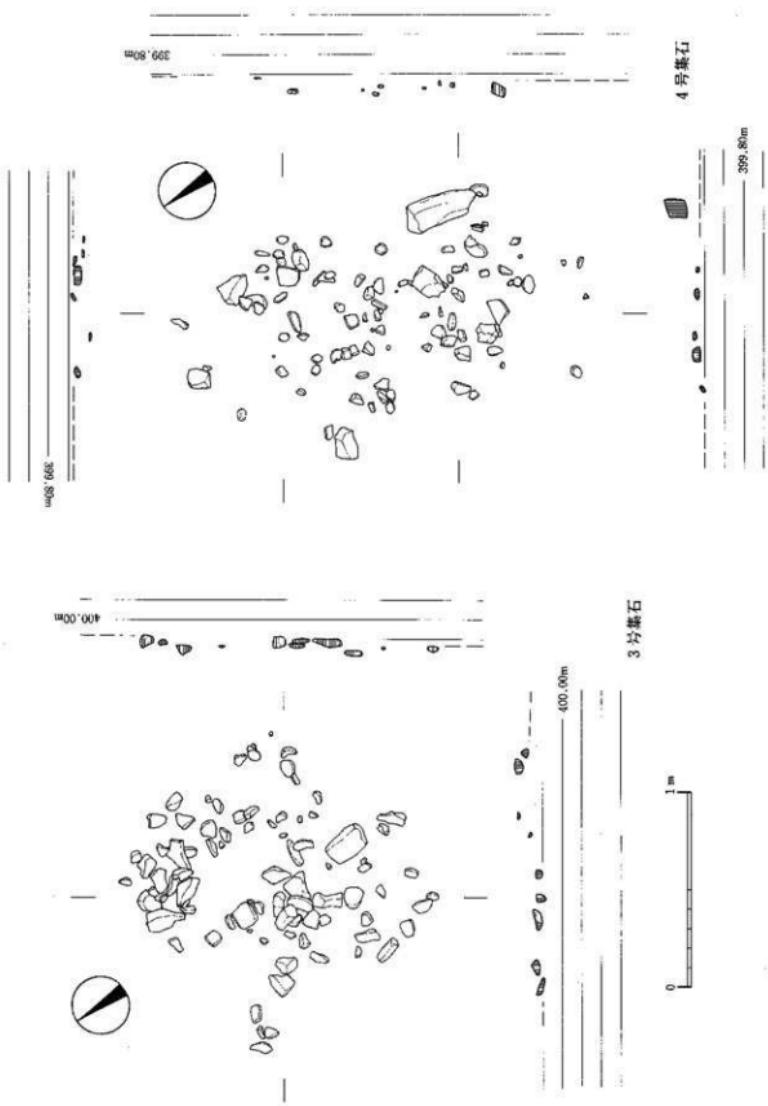


Fig.11 集石測図 (2) (1/25)

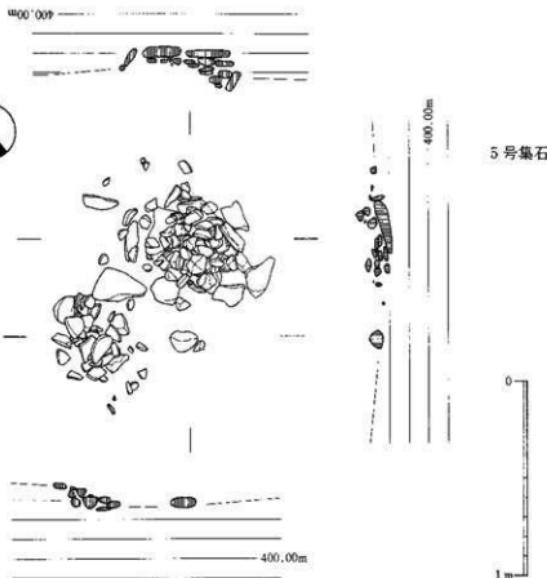
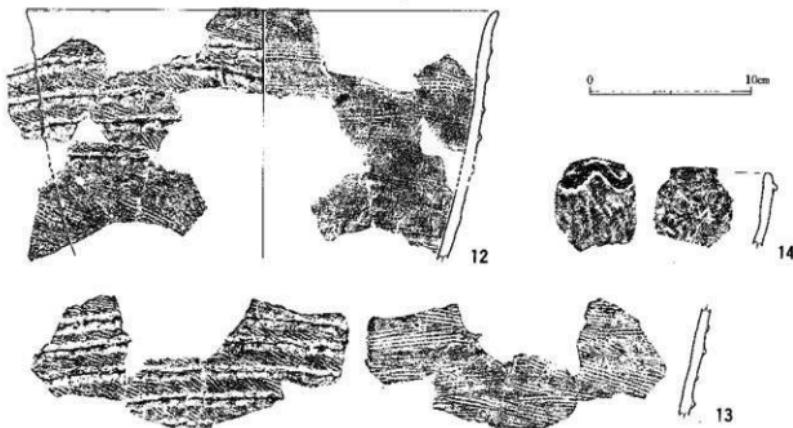


Fig.12 集石実測図(3) (1/25)



12・13……2号集石
14……3号基石

Fig.13 集石付近出土土器実測図 (1/35)

2号集石

B-2区のⅢ層中検出。この集石は、焼砾ではなく、剥片や土器片が1.8m×0.9m程の範囲に集中する特異なものである。「集中する」とは言っても、一般的の集石遺構に比べると集積の度合いは低い。

土器は轟B式に属するもので(12・13)、地文に条痕を施し、口縁部付近に5条の突帯を巡らせる。剥片は全て砂岩である。製作址あるいはそれに類する空間とも考えられるが、剥片どうしは接合はしないようであり、また製品の存在の有無を含めて問題点も多い。

3号集石

B-1・2区のⅢ層中検出。比較的大きな、完形に近い砾が多い。砾は径1.5m程の範囲に集中するが、南西側には、図に収録した範囲の外にも砾の分布がのびている。

4号集石

C-2区のⅢ層中検出。赤く変化した角砾と石錐(314・327)より構成される集石である。規模は1.6m×1.4m程。

5号集石

B-2区検出。唯一の敷石を有する形態のもので、敷石のレベルからⅢ層下部に構築されたと考えられる。厳密には2つの集石と見た方が良さそうで、規模は東側で0.8m×0.65m、西側で0.5m×0.4mを測る。砾間から少量の土器片や石器が出土している。

なお、以上の集石遺構の他にも、C-1・2区を中心に多くの砾の集積箇所が認められる。また、単独で存在する砾も多い。

第3節 繩文時代の遺物

(1) 土器

前述の通り、主たる遺物包含層はⅢ層(特にⅢa層)であり、所属時期は繩文時代中期を中心となっている。都合21に分類して記述を進める。

第1類(15・16・26)

繩文時代早期の押型文系土器に属するものである。ただし、出土層はいずれもⅢa層であり、該期の本来の遺物包含層と見られるV層(鬼界アカホヤ火山灰層より下位にあたる)からは出土していない。

15と16は横円押型文を施す胴部片。26は圧痕文を付す突帯と凹線文の文様要素の組み合わせから手向山式に該当すると考えられる。

第2類(17)

17の1点のみ認められた。胴部以下の形態は不明。外面に縱方向の条痕を施している。口唇部には平坦面を形成する。II層からの出土であるが、おそらく繩文時代早期の条痕文系土器に属するものであろう。

第3類(18~25)

断面三角形の細い突帯を巡らせる。器形の全容が判明する資料は皆無で、口縁部付近の破片について見てみると、a、横位の突帯を巡らせるもの(18・19)、b、縱位の突帯を付するもの(21・22)、c、横位、縱位の突帯を組み合わせるもの(23)、d、横位の突帯と圧痕文を組み合わせるもの(25)、e、斜位の突帯を巡らせるもの(20)といった具合に、突帯の巡らせ方に差異が認められる。

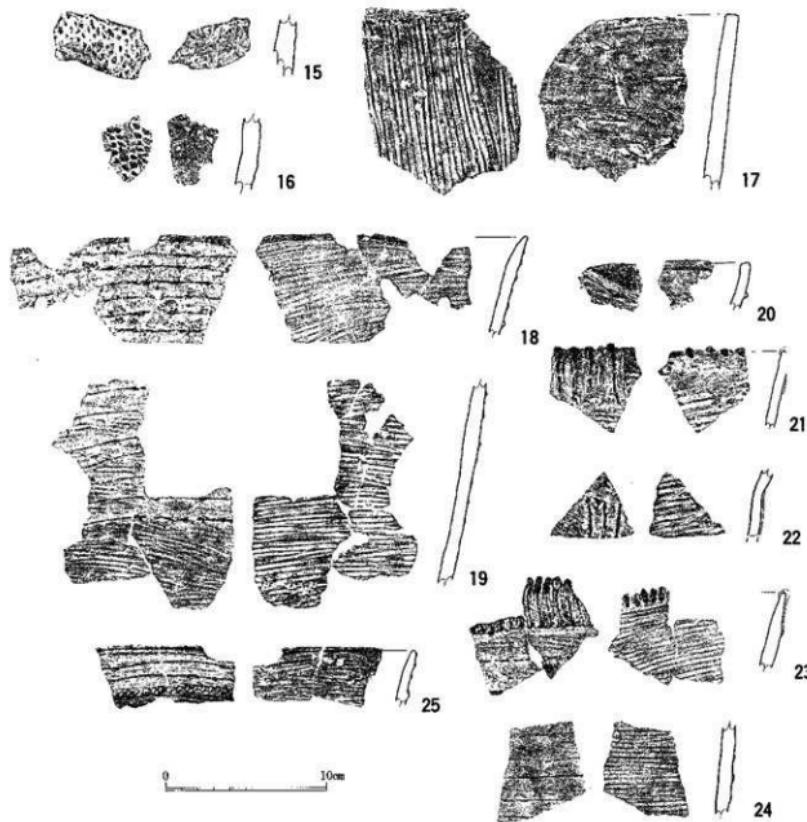


Fig.14 織文土器実測図 (1) (1/3)

土器観察所見

15. C-1. III a 淡黄橙 楕円押型文／ナデ 16. C-1. III a 淡黄橙・褐 楕円押型文／ナデ
 17. C-2. I 黄橙 条痕／ナデ 白色粒 18. B-5. III a 黒褐・にぶい橙 ナデ・突帯／
 条痕 19. A・B-6 III a にぶい褐／橙 条痕（突帯）／条痕 乳白色粒 20. C-2. III a
 褐・赤褐 ナデ（突帯）／ナデ 赤褐色粒 21. C-1. III a 灰褐／にぶい褐 条痕・ナデ（突
 帯）／条痕・ナデ 22. C-2. III a 明黄色褐 ナデ（突帯）／条痕 石英 23. B-5・6. III
 a・III b 黒褐／にぶい橙 条痕（突帯…口唇部～内面まで）／条痕 石英 24. A-6. III a
 黄褐／にぶい褐 条痕（突帯）／条痕 石英・白色粒 25. A-3. III a にぶい橙／にぶい黄橙
 条痕・ナデ（突帯・庄痕文）／条痕 石英 26. 废土 浅黄橙 ナデ（凹線文・突帯+庄痕文）／ナ
 デ 白色粒

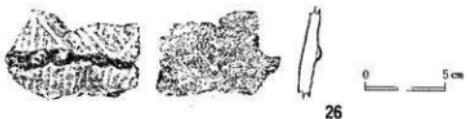


Fig.15 縄文土器実測図(2)

第4類 (27・28)

外・内面ともに条痕を施すもの。27は小形の深鉢であろう。28の外面は、地文の横方向の条痕の上に斜格子状の条痕文が重ねられている。この28は第2類とした縄文時代早期の条痕文系土器と関連のあるものかも知れない。

第5類 (29~32)

微細な刻目突帯と平行沈線文・沈線文の組み合わせによる文様を描く。まとまる破片はなく、器形は不明。29~31は同一個体で、30のみに突帯が認められる。32には部分的に曲線状の沈線文(垂下文)が見られる。

第6類 (33)

平行沈線による弧文を施すもの。認識できたのは33の1点のみであり、器形は不明。胎土中に滑石を混入させている。

第7類 (34~38)

脇部破片のみの出土で、器形、文様の全容は不明であるが、横方向の平行沈線文により区画帯を形成し、その間に複合鋸歯文を施す基本文様パターンが読みとれる。36は口縁部近くで、内面にも沈線文が施される。

なお39は、鋭い横方向の平行沈線文の部分のみ認識できる小さな破片である。第7類に見られる横方向の区画帯の部分であろうが、他の第7類の土器とは色調・胎土が明らかに異なる。

第8類 (40~45)

縦方向の条痕の上に重ねて2本単位の平行沈線による弧文を施すものである。出土しているのは脇部破片のみで、器形は不明。全て胎土の特徴は似通っている。41にはおそらく一周する(区画帯?)沈線文が巡っている。

第9類 (46~48)

連点文系土器をひとまとめにしている。口縁部を中心に比較的まとまる個体が見られた。46は波状口縁を呈し、脇部以上がゆるやかに外反する器形となる。口唇部には刻みを施す。外面は、ナデによる器面調整の後、袈裟擗状に連点文(部分的に押引文状となる)を施文する。47は単純な深鉢形の器形を呈する。器壁は脇部の最厚部で7mm程度であり、本遺跡出土の土器群の中では最も薄い部類に属する。口縁部外面に連点文を施す。内面には明瞭に条痕が残る。一方、外面は、口縁部の一部に条痕の跡が認められるものの、基本的にはナデ調整である。48は小破片で情報量は少ないが、47の同様の特徴を持つ。胎土も似通っていることから、同一個体である可能性も否定できない。

49は口縁下部に連点文、その下に条痕文と沈線文を施すもので、所属時期を含めて不明な点が多い。その特徴から、第9類に関連するものと位置付けておく。

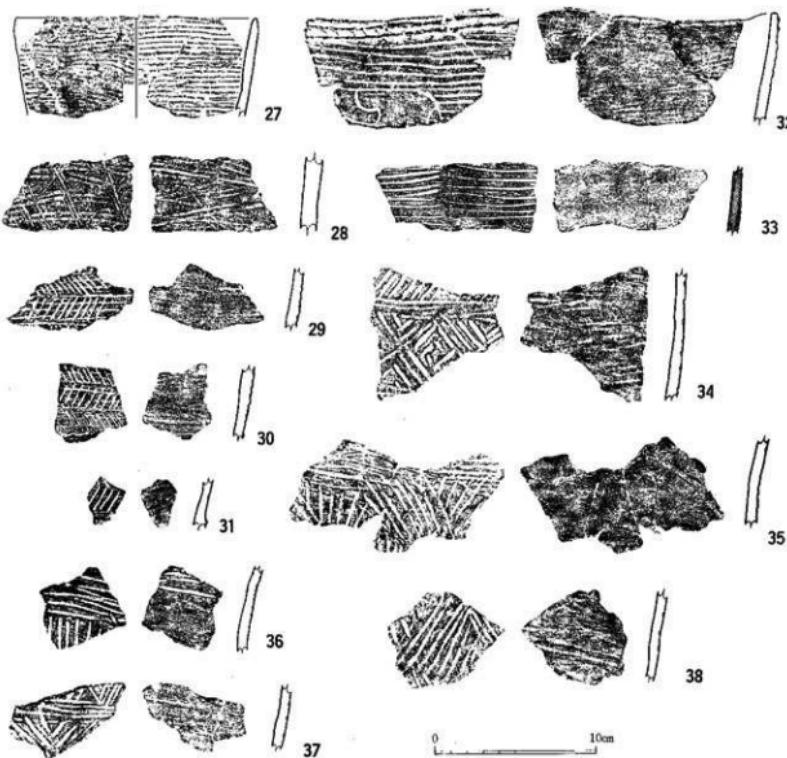


Fig.16 裝文土器実測図 (3) (1/3)

土器観察所見

27. C-1. III a にぶい黄褐／にぶい黄橙 条痕 赤褐色 28. B-3. III a 灰黄褐・明黄褐
条痕 白色粒・雲母 29. C-1. III a上部 灰褐／淡黄 ナデ(沈線文)／ナデ 角閃石 30. C-
1. III a 浅黄褐／にぶい黄橙 ナデ(沈線文)／ナデ 胎土29に似る 31. C-1. III a にぶ
い黄橙 ナデ(沈線文)／ナデ 胎土29に似る 32. C-1. III a 浅黄／暗灰黄 ナデ(沈線文・
突帯)／ていねいなナデ 角閃石多量 33. C-3. III a 灰黄褐／にぶい黄橙 ナデ(沈線文)／
ナデ 滑石・褐色粒 34. C-2. III a 黒褐／にぶい黄褐 ナデ(沈線文)／粗いナデ 石英
35. C-2. III a 黑褐／灰黄褐 ナデ(沈線文) 角閃石・白色粒 36. B-2. III a 上
部 にぶい褐／明黄褐 ナデ(沈線文) 角閃石・白色粒 37. C-3. III a 灰褐／にぶい褐 ナ
デ(沈線文)／粗いナデ 角閃石・白色粒 38. C-2. III a 黑褐／明灰黄 ナデ(沈線文)／ナ
デ 角閃石・白色粒 胎土35に似る

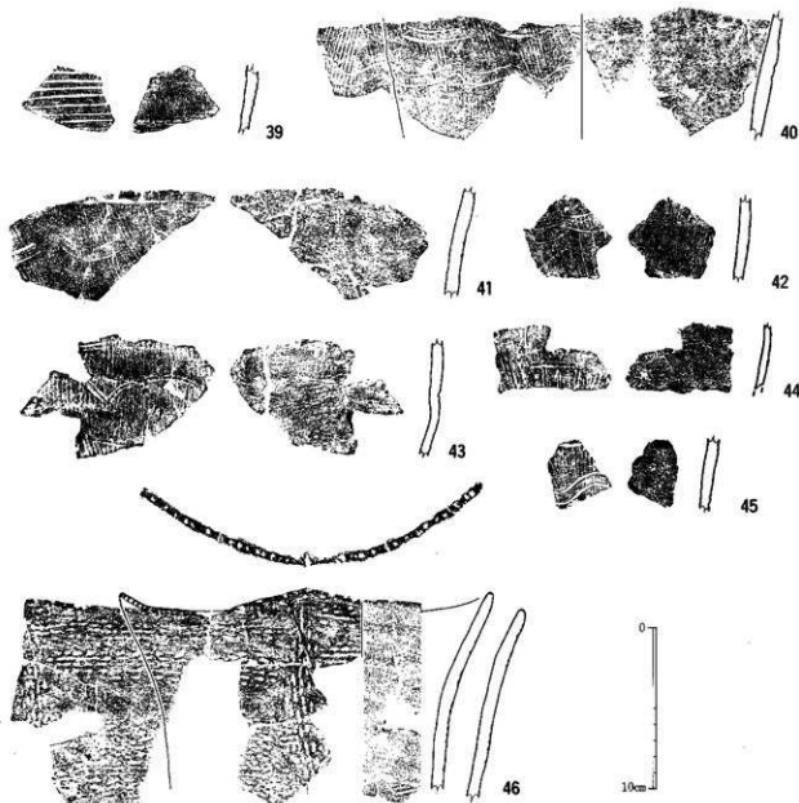


Fig.17 繪文土器実測図(4)(1/3)

土器観察所見

39. B-1. I にぶい黄橙 ナデ(沈線文)/ナデ 角閃石 40. B・C-1・4. III a・III b にぶい黄橙 条痕(沈線文)/ナデ 角閃石・白色粒 41. C-1・2. III a上部・III a 橙 条痕(沈線文)/ナデ 角閃石・石英・赤褐色粒 42. C-1. II にぶい黄橙/灰黄褐 ナデ(沈線文)/ナデ 角閃石・石英 43. C-2. III a 灰黄褐・にぶい黄橙 条痕(沈線文)/ナデ 赤褐色粒 44. C-2. III b にぶい黄橙 橙 条痕(沈線文)/ナデ 角閃石・赤褐色粒 45. C-2. III b にぶい黄橙 橙・灰褐 ナデ(連点文)/ナデ(一部条痕) 赤褐色粒 46. C-2. III a にぶい黄橙/橙 橙・灰褐 ナデ(連点文)/ナデ(連点文)/ナデ(一部条痕) 角閃石 47. C-1. III a・III b にぶい黄橙・橙・灰褐ナデ(連点文)/条痕 角閃石 48. C-1. III b 黑褐/橙 ナデ(連点文)/条痕 角閃石 49. C-1. III b 橙 条痕(連点文・凹線文)/ナデ 石英・赤褐色粒

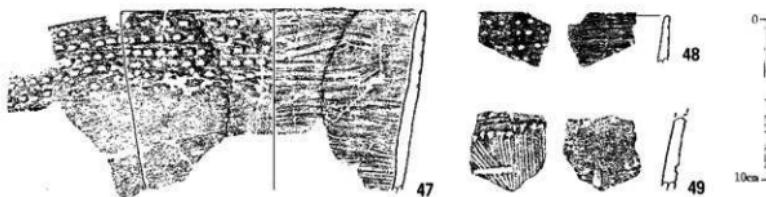


Fig.18 縄文土器実測図 (5) (1/3)

第10類 (50~91)

第10類~第13類は、密接な関係を有する一群と考えられる。

縄文、撚糸文や条痕などの地文（多くは単節の縄文）の上に、押引文、沈線文と突帯の組み合わせによる文様を描くものである。器形の全容が判明する資料はない。口縁部について見るならば、a、内湾するもの（50・58など）、b、端部のみを内側へ屈曲させるもの（56・85など）、c、ほぼ直行するもの（74・90など）といった具合に多様性が認められ、それは時間差の現出であると考えられている。

突帯は、50~52のように波状に張りつける形が多く、ひとつの基本形と見ることも可能であろう。61のように横方向に巡る例や、54・59のように不規則に展開する例も存在する。また、断面形や刻目の有無といった点にも差異が見られる。

第11類 (92~118)

撚糸文や条痕などの地文（こちらは多くの場合条痕）の上に、沈線文、連点文を施す。沈線文は突帯と同様、口縁上部を巡る波状の文様形が基本となるようである。また連点文も口縁上部を一周するものが多い。98・99などは、このパターンからはずれる資料である。

口縁部形態も第10類と同様の特徴を示しており、それに準じて分類すれば、a、内湾するもの（92など）、b、端部のみを内側へ屈曲させるもの（101など）、c、ほぼ直行するもの（106など）となろう。

なお、胴部破片の116~123は、第10類、第11類のいずれかに属する資料と考えられる。

第12類 (124~127)

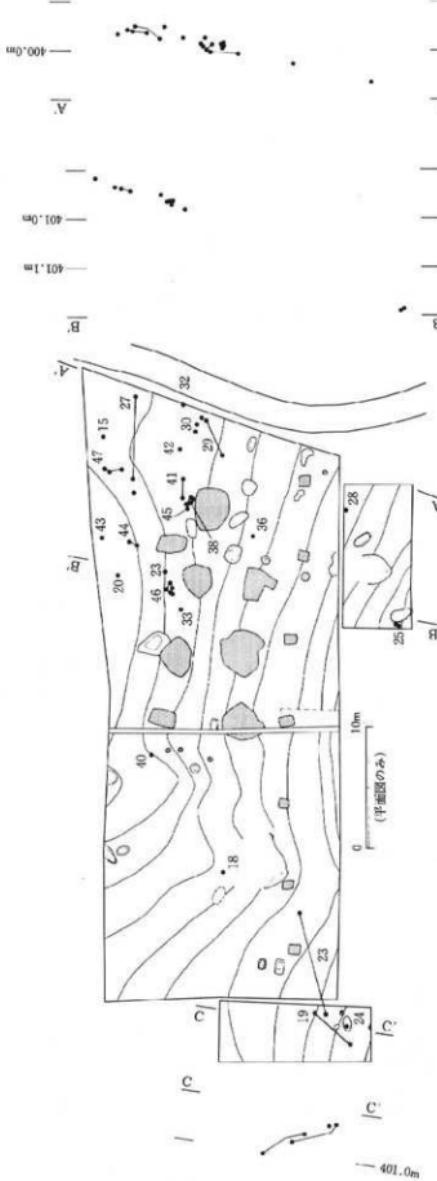
口唇部に刻目を施す以外は無文か、地文として撚糸文や条痕が見られるだけの土器。図を掲載したものは比較的まとまる個体である。口縁部は内湾する（127）か、ゆるやかなカーブを描いて外に開き、端部のみがわずかに内側に曲がる（124~126）。胴部はあまり張らないようである。124の内側には接合が明瞭に認められる。127は波状となる口縁部の頂部内面にのみ刻目が見られる。

第13類 (128・143~146)

2段R L縄文（128）、条痕（143）などの地文以外に何らかの文様を施さない一群。144と145は外・内面ともナデ調整で地文も見られない一群で、口縁部は、a、口縁部が内湾するか、b、端部のみを内側へ屈曲させる c、ほぼ直行する（146）形態を示す。

胴部破片の129~142は、第10類から第12類いずれかに属するものであろう。地文として施される縄文

Fig.19 包含層出土土器(早~前期)の出土位置 (平面図 1/400)
1/100



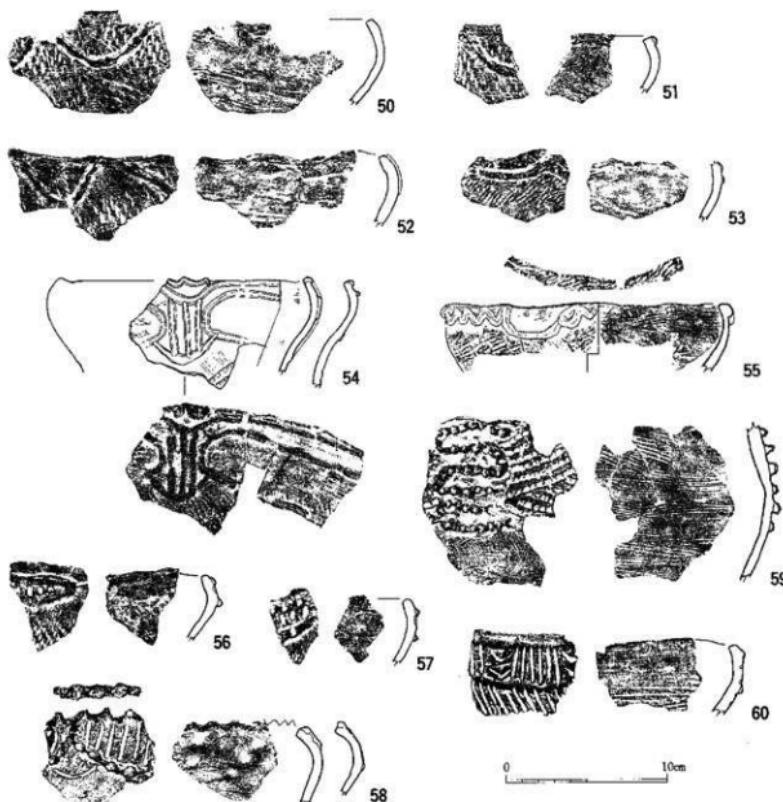


Fig.20 繩文土器実測図 (6) (1/3)

土器観察所見

50. C-2. III a 底黄褐／にぶい黄褐 摺糸文（突帯）／ナデ 角閃石 長石？ 51. C-2.
III a 桶・灰褐／明黄橙 摺糸文・粗いナデ（突帯）／ナデ 角閃石 52. C-2・D-1. III a
明黄褐 角閃石・長石？ 53. C-3. III a 桶 繩文（突帯+刻目）／ナデ 長石？・赤褐色粒
54. C-1. III a にぶい黄橙・暗褐 ナデ・摺文（压痕文・突帯）／ナデ 雲母 55. C-1.
III a 明黄褐・黒褐・にぶい褐 摺糸文（突帯）／ナデ 雲母 56. C-2. III a 黄橙 2
段RL繩文（压痕文・突帯）／ナデ 長石？ 57. D-1. III a 暗黄 繩文（压痕文・突帯）／ナデ
石英 58. C-2. III a 暗褐・にぶい黄橙 ナデ（凹線文・突帯+刻目）／ナデ 59. C-
1. III a・III b にぶい桶・灰褐 条痕（押引文・突帯+刻目）／条痕 白色粒 60. D-1. III a
にぶい褐／桶 ナデ（沈線文・突帯）／ナデ

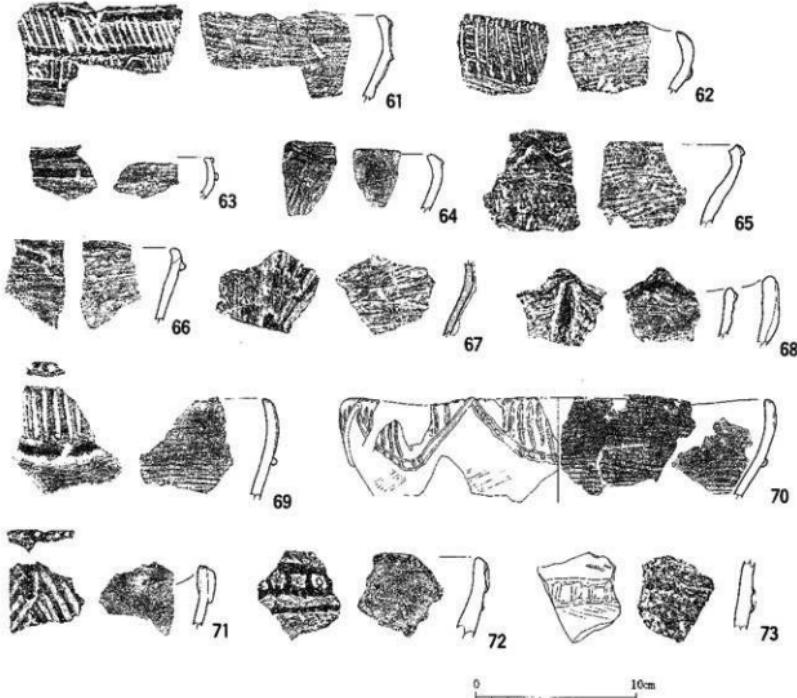


Fig.21 縄文土器実測図(7) (1/3)

土器観察所見

61. C-1. III a 橙/明褐 ナデ(沈線文・突帯)/ナデ 62. C-1. III a 橙/橙・にぶい
黄褐ナデ(沈線文・突帯+刻目)/条痕に近いナデ 石英 63. C-1. III a 黄橙 ナデ(突帯)
/ナデ 角閃石 64. C-1. III a にぶい褐/橙 条痕(突帯)/ナデ 角閃石 65. B-2.
III a 明褐灰/黒褐 条痕(突帯)/条痕 角閃石・白色粒 66. C-1. III a 褐/にぶい黄褐
粗いナデ(突帯)/粗いナデ 石英 67. B-1. III a 淡黄/淡黄・黒褐 条痕に近いナデ(突
帯)/条痕に近いナデ 滑石 68. B-2. III a ナデ・撚糸文(突帯)/ナデ 石英 69. C-
1. III a 黒褐/にぶい褐 ナデ、条痕(突帯)/条痕 70. C-1. III a 橙・褐灰/にぶい褐
ナデ、条痕(短沈線文・突帯+压痕文)/条痕 長石・石英・赤褐色粒 71. B-5. III a 橙
ナデ(凹線文・突帯)/ナデ 72. C-1. II 橙 ナデ(突帯)/ナデ 73. B-2. III a 橙
ナデ・撚糸文(突帯)/ナデ 角閃石・石英

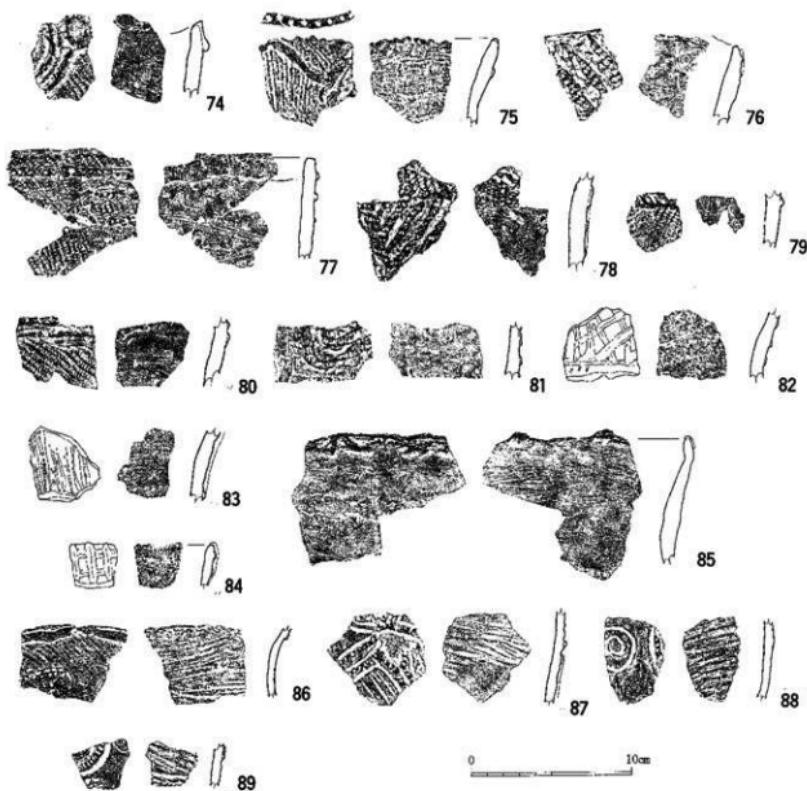


Fig.22 繩文土器実測図(8)(1/3)

土器観察所見

74. B - 1. III a 明褐／褐 繩文(突帯)／ナデ 赤褐色粒 75. C - 3. III a 褐／褐・橙 条痕(突帯)／条痕 長石？ 76. C - 2. III a 黒褐・にぶい黄褐／にぶい黄褐 繩文(突帯+繩文)／ナデ 石英・赤褐色粒 77. B - 2. III a にぶい褐 繩文(突帯+繩文)／ナデ 条痕に近いナデ 白色粒 78. B - 2. III a 灰黄褐・浅黄 繩文(突帯+繩文)／ナデ 胎土76に似る 79. B - 2. III a にぶい褐 繩文(突帯)／ナデ 赤褐色粒・石英 80. C - 3. III a にぶい黄橙 2段RL繩文(突帯)／粗いナデ 石英・赤褐色粒 81. C - 3. III a 灰褐／灰黄褐 2段RL繩文(突帯+繩文)／ナデ 白色粒・赤褐色粒 82. C - 2. III a 灰黄褐 繩文(突帯)／ナデ 赤褐色粒・白色粒 83. C - 1. III a にぶい黄橙／褐 繩文(突帯+繩文)／ナデ 角閃石・赤褐色粒 84. C - 2. III a 上部 にぶい橙／橙 ナデ？(突帯)／ナデ 赤褐色粒・白色粒 85. C - 3. III a にぶい黄橙／褐灰・浅黄橙 ナデ(突帯)／ナデ 白色粒 86. C - 1. III a 黑褐 条痕(沈線文・連点文・突帯)／条痕 角閃石 87. C - 2. III a にぶい橙／褐灰 ナデ(沈線文・突帯+刻目)／条痕 88. B - 2. II 黑褐 ナデ(沈線文・突帯+刻目)／条痕 89. B - 3. III a 灰黄褐／淡黄 ナデ(沈線文・突帯+刻目)／条痕

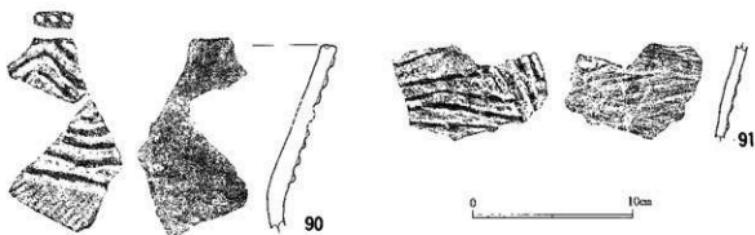


Fig.23 縄文土器実測図 (9) (1/3)

は単節のもので、R L、L Rの両者が認められる。140は、粗い繊維を用いた縄紐による撚糸文と考えている。

第14類 (149・150)

口縁部が外反する。外反する部位の長さは長くない。地文の条痕以外に、何ら文様は見られない。胴部以下の器形は不明である。

152～155は外・内面ともに条痕を施す個体片である。154と155の条痕は粗い。第11類～第14類に属するものと考えられる。

第15類 (151)

小形の深鉢形土器である。これまで取り上げてきた土器群のうち、いずれかの時期の様式（弥生土器研究で用いる「様式J」）のセットを成すものと考えられるが、位置づけは留保しておきたい。

第16類 (156)

口縁部外面に突帯を巡らせたり、わずかに肥厚させて文様帯を形成し、沈線文・連点文を施す。胴部はナデ調整である。

第17類 (114・115・158)

口縁部に突帯を巡らせたり、わずかに肥厚させ、文様帯を形成する。口縁部は直行するか、やや内湾気味となる地文としては条痕が施される例が多い。158は文様帯部位に押引状圧痕文を施す。157もおそらく同類に属する個体片であろう。

第18類 (159・160)

わずかに肥厚し外反する口縁部の外面に、沈線文を施す。胴部はナデ調整。

第19類 (161)

波状をなす口縁部の頂部に切れ込みを入れる。口縁部は内側に屈曲し、外面に沈線文や三日月状の短沈線文を施す。この161は若干磨滅しているため明瞭でないが、縄文が施されていた可能性もある。

第20類 (162)

口縁部がわずかに内側に屈曲し、外面に沈線文・縄文を施す。胴部破片の163は、第19類か第20類に属すると見られる。

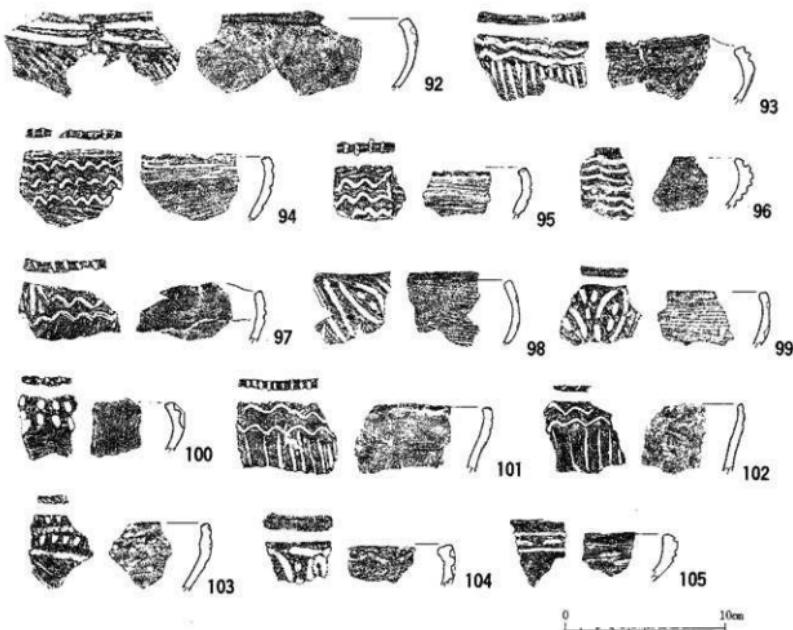


Fig.24 摺文土器実測図 (10 (1/3))

土器観察所見

90. B-3. C-1. III a 淡橙・淡黄 2段LR縄文(突帯)/ナデ 赤褐色粒・白色粒 91.
 B-1. III a にぶい黄褐 縄文(突帯)/粗いナデ 赤褐色粒 92. C-2. III a 暗灰黄・黄
 灰 焦糸文(凹線・凹点文)ナデ 雲母・石英 93. C-2・D-1. III a 淡黄/黒 条痕(沈
 線文)/ナデ 白色粒 94. D-1. III a にぶい黄橙 条痕に近いナデ(沈線文)/条痕に近いナ
 デ 光沢鉱物粒 95. C-1. III a上部 にぶい橙 ナデ(沈線文)/ナデ 長石? 96. C-1.
 III b 浅黄橙 ナデ(沈線文)/ナデ 白色粒 97. C-3. III a 灰黄褐 ナデ(沈線文)/ナデ
 石英 98. B-1. III a にぶい黄褐・灰黄褐 条痕・ナデ(沈線文・凹点文)/条痕 99. D-
 1. III a 浅黄橙 条痕・ナデ(沈線文・凹点文)/ナデ 石英・赤褐色粒 100. B-6. III a
 にぶい橙・灰褐/にぶい褐 ナデ(凹点文)/ナデ 白色粒 101. A-2. III a にぶい黄澄・明
 黄褐 ナデ(沈線文)/ナデ 石英・角閃石 102. C-1. III a 灰黄褐 ナデ(沈線文)/ナデ
 角閃石 103. B-3. II 暗灰黄・黒/暗灰黄 焦糸文(押引文・連点文)/ナデ 角閃石?
 104. C-3. III b にぶい黄橙 ナデ(沈線文)/ナデ 白色粒・石英 105. C-3. III
 a にぶい黄橙 ナデ(沈線文)/ナデ

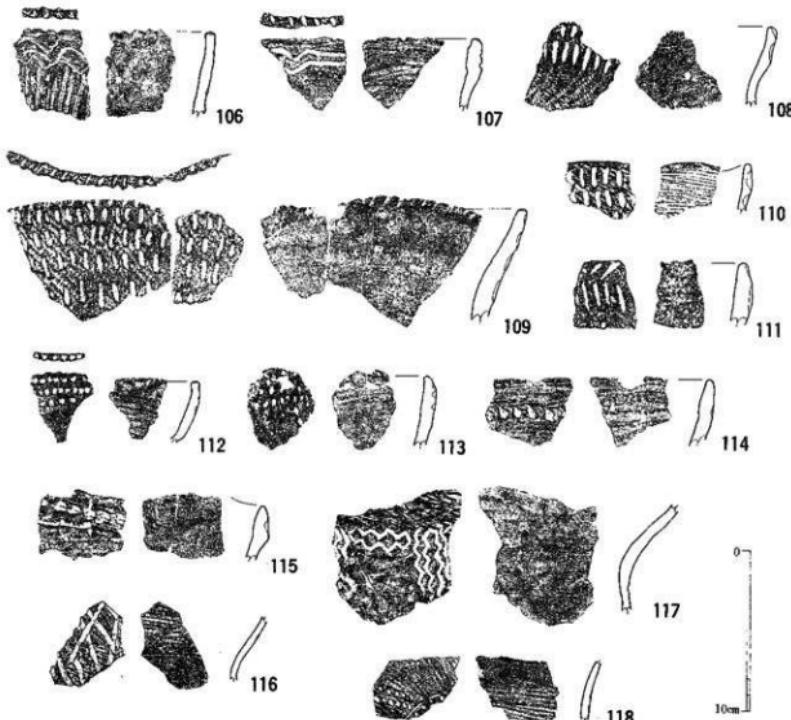


Fig.25 縄文土器実測図 (1) (1/3)

土器観察所見

106. C-3. III a にぶい黄褐／褐灰 ナデ(沈線文・連点文)/ナデ 角閃石・長石? 107. C-1. III a上部 にぶい橙 ナデ(沈線文)/ナデ 石英・赤褐色粒 108. C-1. III a 橙／淡黄 暗糸文(短沈線文)/ナデ 109. B-2・C-1. III a上部・III b にぶい黄褐／明黄褐 繩文(短沈線文)/ナデ 石英 110. C-1. III a にぶい黄橙・黄橙 暗糸文(連点文に近い短沈線文)/条痕 石英・赤褐色粒 111. C-2. III a上部 にぶい黄橙／灰黄褐 ナデ(短沈線文)/ナデ 石英・赤褐色粒 112. C-5. III a 淡黄・灰黄 ナデ(連点文)/ナデ 白色粒 113. B-2. III a 黄灰 ナデ・暗糸文(連点文)/ナデ 角閃石・赤褐色粒 114. C-3. III a 浅黄褐・にぶい黄橙 ナデ(压痕文)/ナデ 115. C-5. III a 浅黄橙・灰褐 ナデ(压痕文)/ナデ 赤褐色粒 116. C-2. III b 黒褐 条痕(沈線文)/条痕 白色粒 117. C-1. III a 浅黄橙・灰黄褐・褐灰 暗糸文・ナデ(沈線文)/ナデ 118. C-1. III a上部 黑褐 条痕(沈線文・連点文)/条痕 光沢鉱物粒・白色粒 胎土116に似る

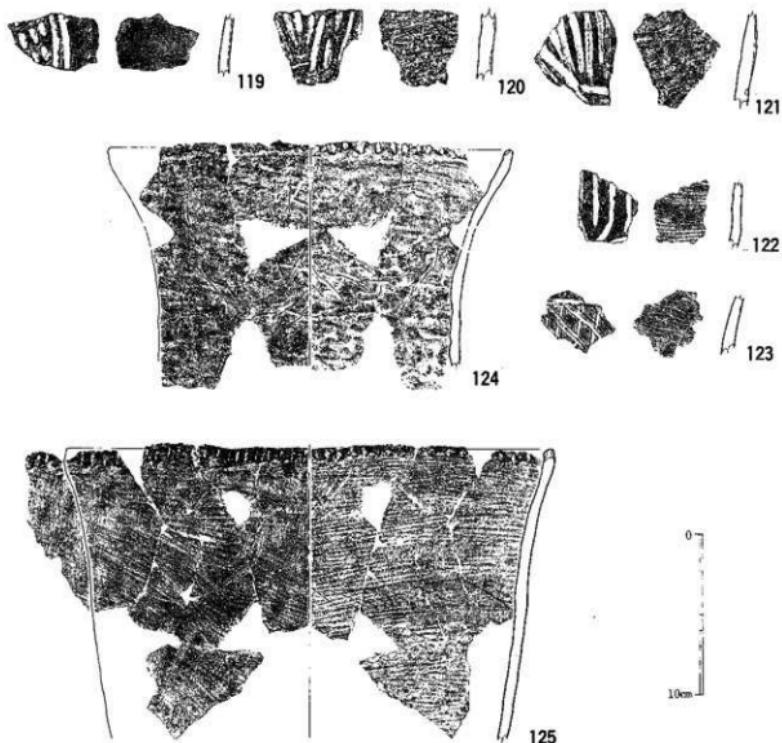


Fig.26 縄文土器実測図 (1/3)

土器観察所見

119. B - 6. III a 橙／灰褐色 ナデ（沈線文・連点文）／ナデ 120. C - 2. III a 橙／浅黄橙 ナデ（沈線文）／粗いナデ 長石？ 121. C - 2. III a ナデ（沈線文）／粗いナデ 長石？・赤褐色粒 122. C - 1. III a にぶい黄橙／灰黄褐色 条痕（沈線文）／条痕 石英・白色粒 123. C - 2. III a 上部 にぶい橙／にぶい黄褐色 ナデ（沈線文…繊維痕明瞭に残る）／ナデ 赤褐色粒 124. C - 1. 2. III a + III b 浅黄橙／にぶい橙・にぶい褐 ナデ／ナデ（口唇部近くに刻目） 白色粒 内面に接合痕明瞭に残る 125. C - 1. III a 橙・黒／橙・灰 条痕（口唇部近くに刻目）／条痕（口唇部近くに刻目） 白色粒・赤褐色粒

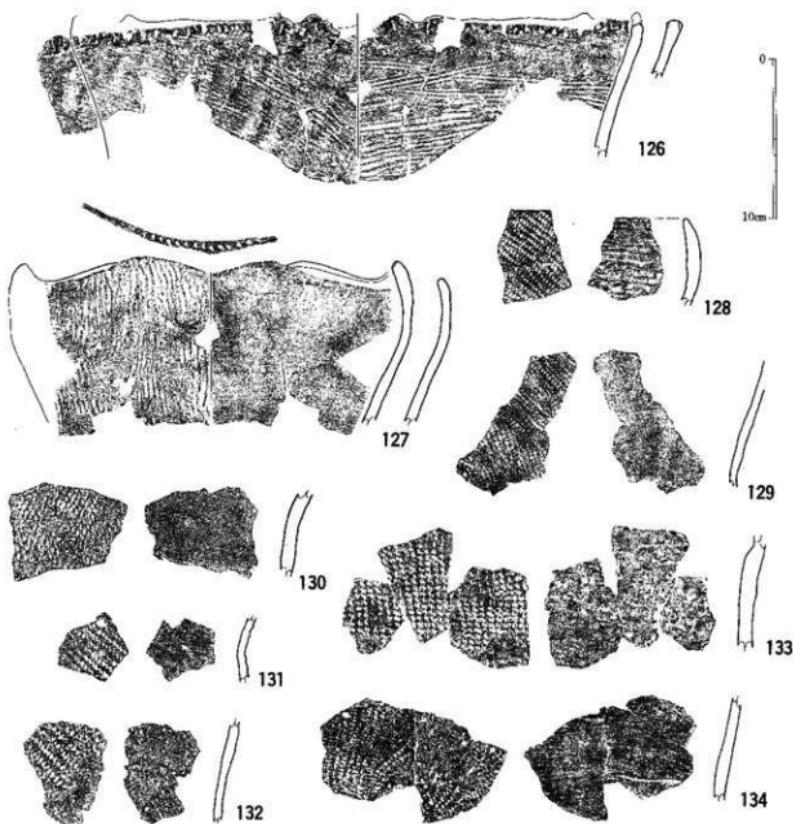


Fig.27 繩文土器実測図 13 (1/3)

土器観察所見

126. C - 1. III a 橙・黒／橙 条痕（口唇部近くに刻目）／条痕（口唇部近くに刻目） 白色粒・赤褐色粒 127. C - 1. III a 淡黄・にぶい黄橙 焦糸文／ナデ（口唇部近くに刻目） 128. A - 2. III a 黒／黄褐 2段RL縩文／ナデ・粗いナデ 石英・赤褐色粒 129. B - 2. II にぶい黄褐 2段RL縩文／ナデ・粗いナデ 石英・赤褐色粒 130. C - 1. にぶい黄橙・灰黄褐／にぶい黄橙 焦糸文／ナデ 石英 131. C - 1. III b 黑褐 縩文／ナデ 長石？ 132. C - 2. III a 浅黄橙／明褐灰 2段RL縩文／ナデ 石英・白色粒多量 133. C - 2. III a 上部・III a・III b 明赤褐 3段RLR縩文／ナデ 赤褐色粒 134. C - 2. III a・III b 浅黄橙／橙 縩文／ナデ 赤褐色粒

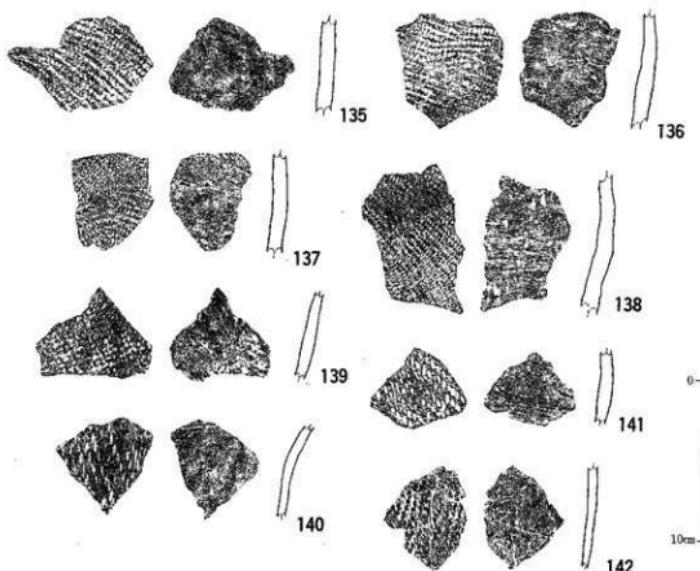


Fig.28 縄文土器実測図 (14 (1/3)

土器観察所見

135. C-2. III a にぶい黄橙・灰黄褐 2段R L縄文/ナデ 赤褐色粒 136. D-1. III a
2段L R縄文/ナデ 赤褐色粒 137. B-2. II 橙/にぶい橙 2段R L縄文/ナデ 赤褐色粒 138. B-2.
II a上部 黒/にぶい黄褐 焼糸文/ナデ 139. B-2. II a 上部 黒/にぶい黄褐 2段R L縄文/ナデ
赤褐色粒 140. C-2. III a にぶい黄橙・黒褐/明黄褐・灰黄褐 焼糸文/ナデ 長石? 141. C-1. III a 橙 焼糸文/ナデ 長石?・赤褐色粒 142.
C-1. III a 橙 焼糸文/ナデ 赤褐色粒・石英 143. C-1. 2. III a 橙 条痕/条痕
白色粒 補修孔あり 144. C-4. III a 明褐 ナデ/ナデ 角閃石・石英・赤褐色粒・白色粒 145.
C-2. III a上部・III a 橙 ナデ・みがきに近いナデ/ナデ 石英・白色粒 146. C-5.
III a 浅黄/にぶい黄 条痕/粗いナデ 石英・白色粒

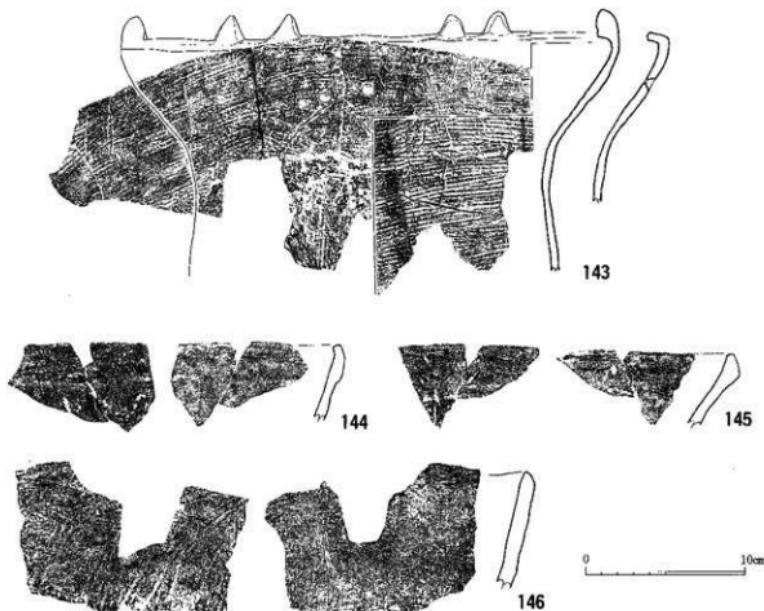


Fig.29 繩文土器実測図 (15 (1/3)

第21類 (164・165)

縄文時代後期該当と考えられる無文土器。口縁部が外反する器形のものである。

底部 (166~174)

完形の個体が皆無であるため、各「類」と底部の関係は不明と言わざるを得ない。166は上げ底となるもの。171は外面の最下部に圧痕文（堅果によるものか）を付す。

(2)石器

土器同様、Ⅲ層（Ⅲa層）を中心に出土している。特に石鎚と石錐の多さは注目に値する。

石錐 (178~291)

出土総数は未製品も含めると316点に上がる。今回の報告では完形、もしくはほぼ完形に近いものを図示している。

それらの全体形を見るならば、a、正三角形を呈するもの（178~207・238~267）b、二等辺三角形を呈するもの（208~237・268~291）という大きさは2つの類別を設定することが可能となろう。そして、それについて、平基のもの、全長の1/2以下の浅い抉りの入るもの、全長の1/2をこえる抉りの入るもの、という基部の形状による細分類も可能である。

なお、第2節で触れたV層出土の石錐は、欠損品であるため図は掲載していない。全体形が二等辺三

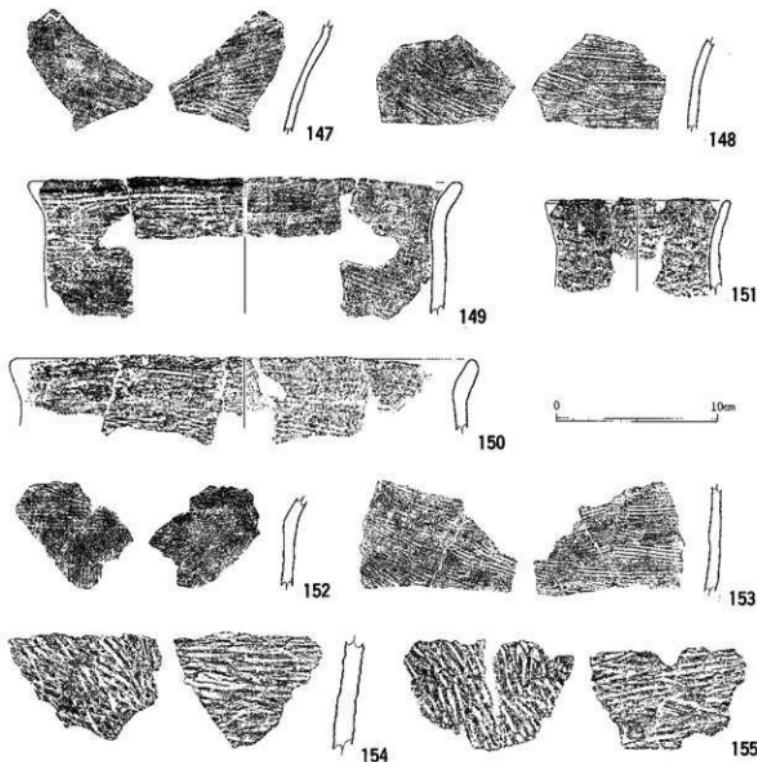


Fig.30 縄文土器実測図 (16) (1/3)

土器観察所見

147. D-1. III a 灰褐・にぶい褐 条痕(沈線文)／条痕 長石? 148. C-2. III a にぶい赤褐 条痕・ナデ／条痕 長石?・赤褐色粒 149. C-4. III a 浅黄橙／橙・黄橙 条痕・ナデ／条痕 灰色小砾・赤褐色粒 150. C-4. III a 橙 条痕・ナデ／条痕・ナデ 灰色小砾・赤褐色粒 151. C-4. 5. III a 明赤褐・にぶい褐 ナデ／ナデ 石英 152. C-1. III a 橙／にぶい褐・橙 条痕／ナデ 石英・赤褐色粒 153. B-2. III 橙／橙・褐灰 条痕／条痕 白色粒・赤褐色粒 154. C-1. III a にぶい橙／灰褐 条痕／条痕 石英・白色粒 胎土154に似る
C-1. III a にぶい橙／灰褐 条痕／条痕 石英・白色粒 胎土154に似る

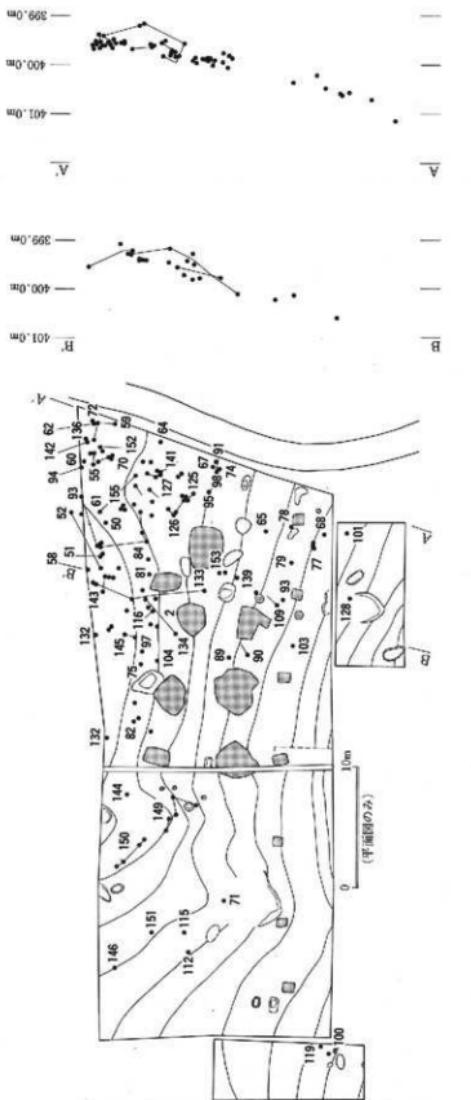


Fig.31 包含層出土土器の出土位置 (2) (平面図 1/400)
(細面図 1/100)

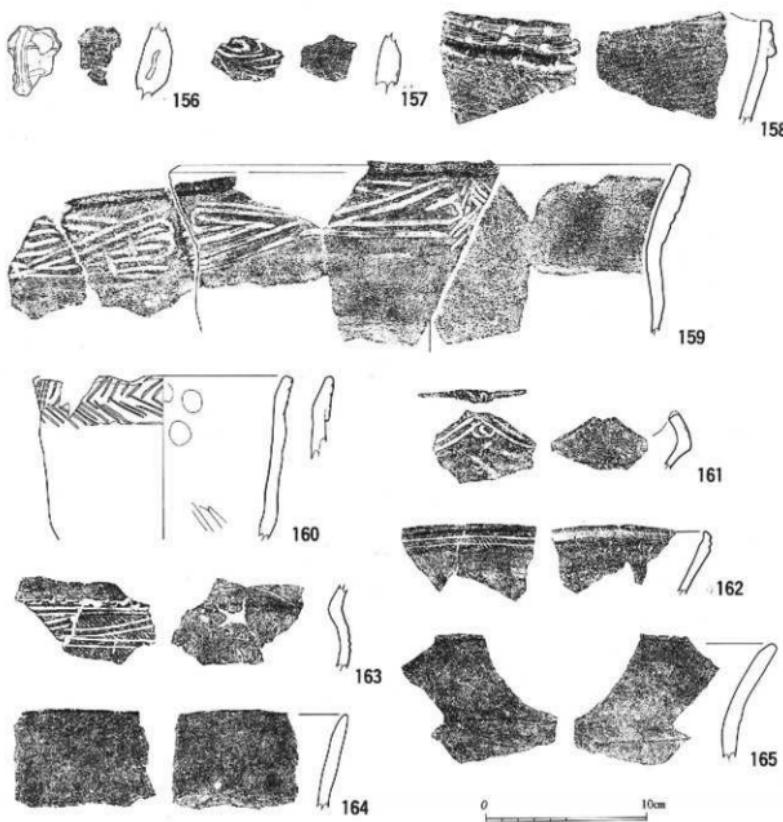


Fig. 32 繩文土器実測図 (17) (1/3)

土器観察所見

156. B - 2. II 橙／にぶい橙 ナデ／ナデ・条痕に近いナデ 楠状把手 157. C - 4. III a 暗灰黄／黄橙 ナデ（沈線文）／ナデ 角閃石・白色粒・赤褐色粒 158. C - 3. III a にぶい橙／にぶい赤褐 条痕（押印文状压痕文・突帯）／条痕 白色粒・赤褐色粒 159. C - 5. III a 灰黄褐／明黄褐 ナデ（沈線文）／ナデ 角閃石・長石？・赤褐色粒 160. C - 3・4. II・III a 橙・黒褐／にぶい橙・黒褐 ナデ（沈線文）／ナデ 石英・赤褐色粒 161. B - 2. II にぶい黄橙・黒／にぶい黄橙 ナデ（沈線文）／ナデ 白色粒・長石？・赤褐色粒 162. C - 2. III a 橙・黒 ていねいなナデ（沈線文・繩文）／ナデ 石英・長石？ 163. B・C - 3. III a 明黄橙／灰褐 ナデ（繩文・沈線文・連点文）／ていねいなナデ 白色粒 164. C - 1. III a 橙／にぶい橙 ナデ／ナデ 長石？・赤褐色粒 165. B - 5. III a 橙／にぶい橙 ナデ／ナデ 石英・長石？・赤褐色粒

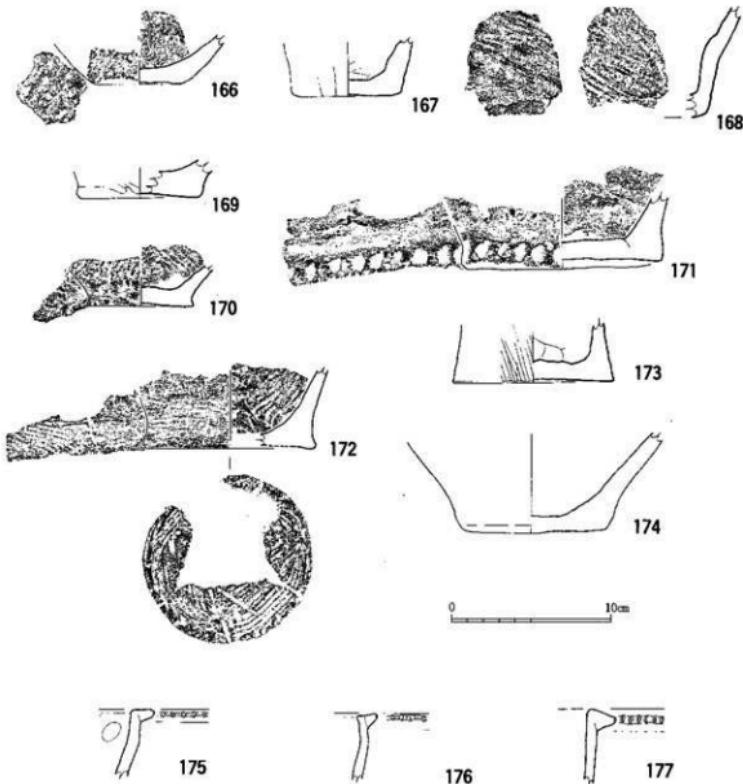


Fig.33 索文・弥生土器実測図 (1/3)

土器観察所見

166. C-2. III a 橙/黒褐 ナデ/ナデ 石英・白色粒 167. C-5. III a 淡黄/にぶい橙
ナデ/ナデ 灰色小螺・赤褐色粒 168. C-3. III a 橙 ナデ/ナデ・条痕 169. C-3. III
a 橙/灰白 ナデ/- 底面に白色の付着物 170. C-2. III a にぶい黄橙/灰灰 条痕・
ナデ/条痕・ナデ 石英・赤褐色粒 底面に白色の付着物 171. C-5. III a にぶい橙・黒褐・
淡黄 ナデ(压痕文)/ナデ 長石? 底面に白色の付着物 172. B-5. III a 淡黄 橙
ナデ・条痕(底面にも条痕)/ナデ 赤褐色粒 173. C-4・5. III a 淡黄 橙 条痕/
ナデ 赤褐色粒・石英 底面に木葉痕 174. C-1. III a 橙・淡黄/淡黄 橙 ナデ/ナデ 赤
褐色小螺・白色小螺 175. C-1. III a 上部 黒灰 ナデ・ハケ/ナデ(口唇部刻目) 176.
C-1. III a 上部 にぶい褐 ナデ・ハケ/ナデ(口唇部刻目) 177. C-1. III a 淡黄 橙
ナデ/ナデ(口唇部刻目) 赤褐色小螺・灰色小螺

角形を呈する黒曜石製のものである。

石錐 (292)

石鎌の可能性も残るが、両側からの調整により、断面略円形の刃部を作り出しているように見受けられる。

石匙 (293~298・300~305)

図示した資料を含めて計32点出土している。抉りは明瞭に認められるが、刃部の形成の甘い、未製品と見られるものもある。縦型 (294~298)、横型 (300~305) の両タイプが見られる。

石鍤 (307~334)

計62点出土している。平均重量は51.3 g。5 g 刻みの場合の最多領域は30 g ~ 35 g である。

石斧 (335)

頁岩製の磨製石斧である。刃部付近が最大幅となる。片面に両側縁からの大きな剥離の痕跡が残る。

スクレイパー (299・306)

299は木の葉状を呈する剥片の一側縁に片刃の刃部を形成している。306は両面から細かい剥離によつて鋸歯状の刃部を作りだしている。

礫石器 (336)

やや小ぶりであるが、磨石的な用途の石器か。縁辺部の全周にわたって擦過面が存在する。

第3節 弥生時代の遺物

弥生時代以降の時期については、遺構は検出されておらず、遺物も弥生土器が数点見られたのみであった (175~177)。

図示した個体は、全て口縁部外面に、刻目を付した三角突帯を巡らす彫形土器の口縁部。いわゆる亀の甲タイプに属するものである。

第4節 遺物の出土位置 (Fig. 19・31・41)

縄文時代早期・前期の土器と考えられる第1類~第9類の分布状況をFig.19に、中期から後期初頭の土器と考えられる第10類~第15類についてはFig.31に、後期以降の第16類~第23類、弥生土器、および石器についてはFig.41に示している。

それから判断するならば、土器の平面分布状況に関しては、縄文時代後期に属すると判断される第16類~第20類の多くが3区~5区で出土している点が注目されるものの、その他については、各類別と出土位置との関係は不明瞭で、主体を占める第10類~第13類などの縄文時代中期の一群は、C-1区を中心まとまりなく出土している。10m程離れた地点の破片どうしの接合例もある。

垂直分布(出土層)の面でも、各類別との意味のある関連は見いだせない。本来の生活面はⅢ b層の近くに(あるいは数面)存在すると考えられるが、遺物の大部分はⅢ a層中からの出土である。Ⅲ a層出土の破片とⅢ b層出土のそれとの接合例もある。一方、縄文時代後期、弥生時代の土器は、Ⅲ b層から出土していない。Ⅲ b層より上位に生活面があったと考えるべきであろう。

石器についても、C区のⅢ a層上部出土のものが多いたことが指摘できるが、原位置を保っているとは考え難く、土器の種別、様式との関連は不明である。

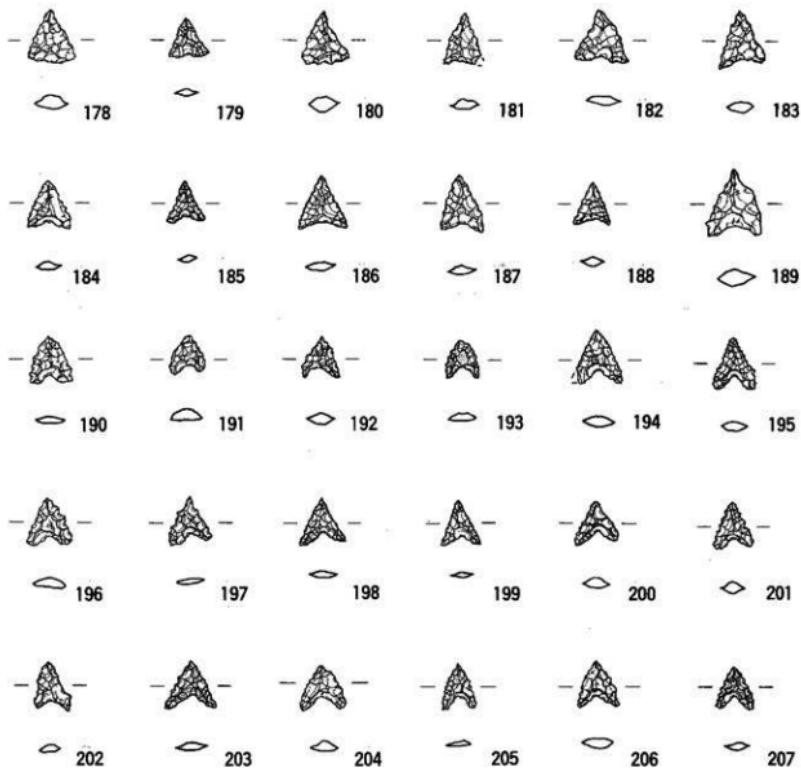
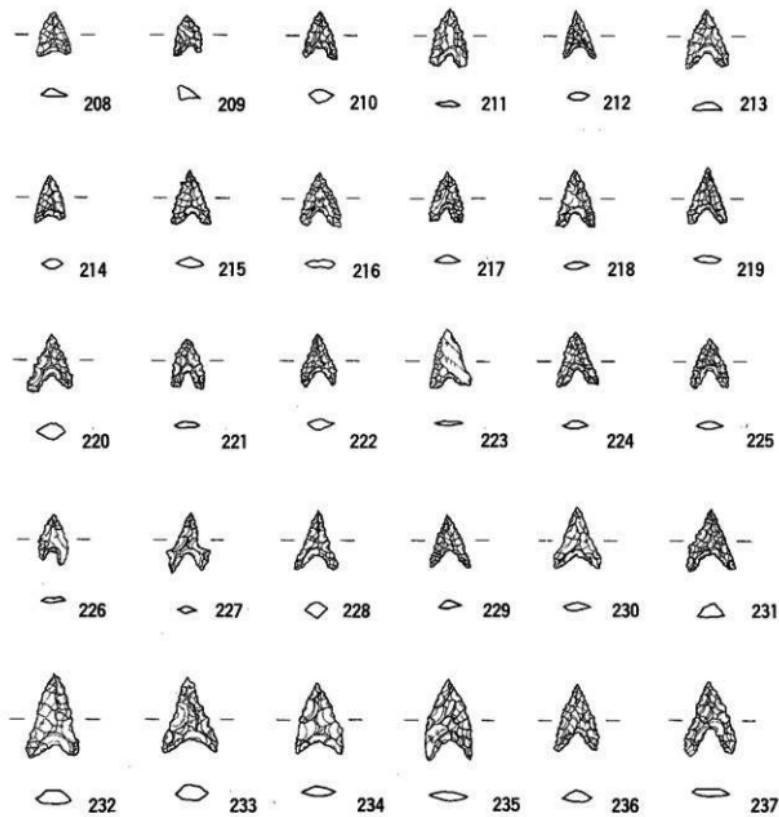


Fig.34 石器実測図 (1) (2/3)

石器石材・重量

178. B-2. III a上部 珪 0.9
 179. B-2. III a 黒曜 0.2
 180. C-2. III a 珪 0.9
 181. C-4. III a 黑曜 0.5
 182. C-1. III a 流紋? 0.5
 183. C-1. III a 珪 0.7
 184. C-1. II 珪 0.6
 185. C-5. II 黑曜 0.2
 186. C-3. III b 黑曜 0.5
 187. C-1. III b 鎌島黒曜 0.5
 188. B-5. I 珪 0.3
 189. C-3. III b 貝 1.3
 190. B-2. II 珪 0.3
 191. B-2. III a 黑曜 0.4
 192. C-1. II 姫島黒曜 0.2
 193. C-2. III a 珪 0.3
 194. B-2. III a 珪 0.6
 195. B-2. I 黑曜 0.5
 196. C-1. III a 貝 0.5
 197. C-2. II 黑曜 0.3
 198. B-1. III a 珪 0.1
 199. A-2. III a 姫島黒曜 0.2
 200. C-2. III a 珪 0.4
 201. C-2. III a 珪 0.4
 202. C-4. III a 黑曜 0.4
 203. B-1. II 貝 0.5
 204. B-1. II 貝 0.5
 205. B-1. III a 珪 0.2
 206. C-1. III a 貝 0.5
 207. C-1. III a 姫島黒曜 0.3



0 5 cm

Fig.35 石器実測図(2) (2/3)

石器石材・重量

208. B-1. II 珪 0.4 209. C-2. II 黒曜 0.4 210. C-2. III a 黑曜 0.4 211. D-1. III a 珪 0.4 212. B-2. II 珪 0.3 213. C-2. III a 貝 0.5 214. C-1. II 珪 0.4 215. C-2. III b 珪 0.5 216. B-1. I 貝 0.5 217. B-2. I 珪 0.3 218. C-1. III a 珪 0.5 219. C-1. III a 珪 0.4 220. C-1. II 黑曜 0.7 221. B-5. III a 貝 0.3 222. C-2. I 黑曜 0.4 223. C-2. II 貝 0.4 224. C-5. III a 珪 0.5 225. B-1. III a 上部 黑曜 0.3 226. C-1. III a 珪 0.3 227. C-6. I 姫島黑曜 0.4 228. C-1. II 珪 0.8 229. C-2. III a 珪 0.4 230. C-5. III a 貝 0.5 231. C-1. III a 黑曜 0.7 232. C-2. II 貝 1.4 233. C-2. III a 貝 1.3

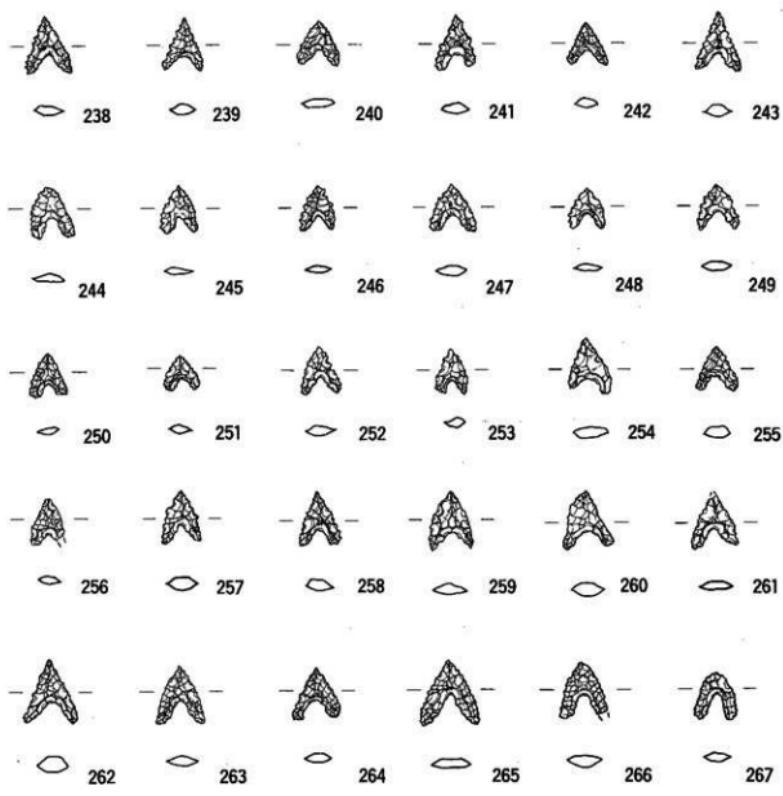


Fig.36 石器実測図 (3) (2/3)

石器石材・重量

234. B-2. III b 珪 1.0 235. C-3. III a 珪 0.9 236. C-2. III a 姫島黒曜 0.7
 237. C-2. III a 姫島黒曜 0.7 238. C-2. III a 珪 0.6 239. B-2. I 黒曜 0.5
 240. C-1. III a 珪 0.4 241. B-3. III a 黒曜 0.5 242. B-4. II 黑曜 0.2 243.
 C-2. III a 珪 0.6 244. C-1. I 姫島黒曜 0.5 245. C-2. II 珪 0.3 246. C-
 2. II a 黑曜 0.3 247. B-1. II 珪 0.5 248. C-2. III a 黑曜 0.2 249. C-2.
 II 珪 0.4 250. C-1. II 黑曜 0.3 251. C-2. III a 黑曜 0.3 252. C-2. III a
 珪 0.3 253. C-3. III a 黑曜 0.3 254. C-2. III a 珪 0.6 255. C-1. III a 黑
 曜 0.3 256. B-2. II 黑曜 0.4 257. C-4. I 石英 0.5 258. C-2. III a 黑曜
 0.4 259. B-1. I 珪 0.7 260. A-6. II 珪 0.7 261. C-2. III a 上部 珪 0.6 2
 62. C-1. III a 頁 0.9 263. C-2. II 頁 0.6 264. C-1. III a 珪 0.4

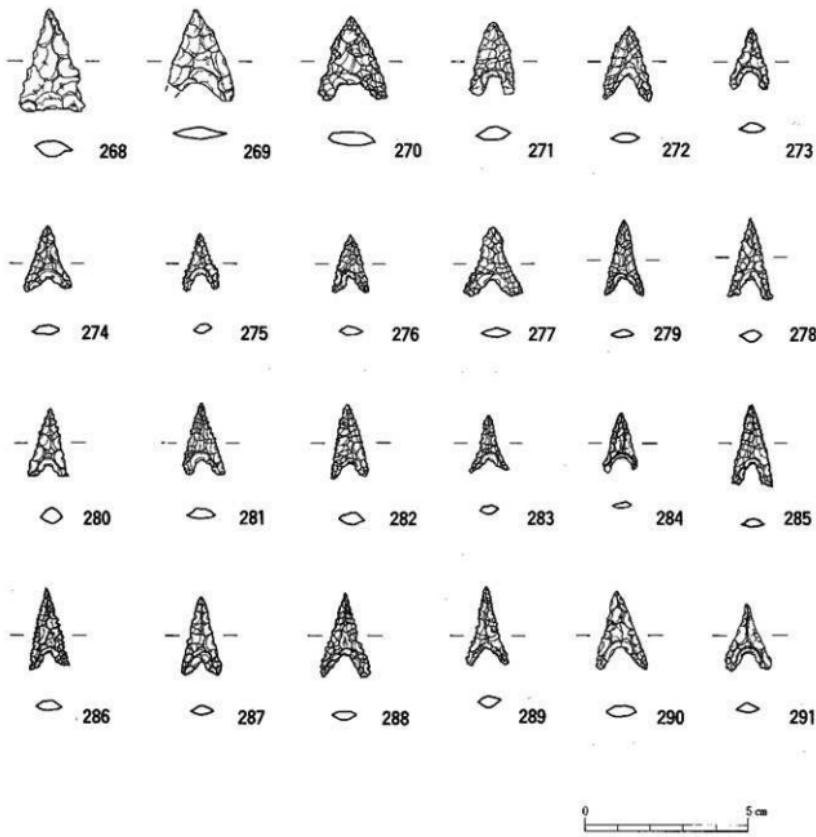


Fig.37 石器実測図(4)(2/3)

石器石材・重量

265. C-2. III a 姫島黒曜 0.7 266. C-1. II 頁 0.6 267. C-1. III b 珪 0.4 268. C-1. III a上部 頁 3.6 269. C-2. III b 安山 1.9 270. C-2. II 珪 1.5 271. B-1. III a 頁 1.0 272. C-2. III a 頁 0.7 273. B-1. III a 珪 0.5 274. B-5. I 姫島黒曜 0.6 275. C-2. III a 珪 0.4 276. C-2. III a 姫島黒曜 0.4 277. C-1. III a 珪 0.7 278. B-4. III a 珪 0.5 279. C-1. III a上部 珪 0.8 280. D-1. III b 珪 0.9 281. C-2. III b 珪 0.6 282. B-2. II 珪 0.8 283. C-2. I 珪 0.3 284. C-1. II 安山 0.4 285. C-1. III a 姫島黒曜 0.6 286. C-2. III b 頁 0.6 287. B-4. III a 姫島黒曜 0.6 288. C-1. II 黒曜 0.7 289. C-2. II 黒曜 0.5 290. C-2. III a 珪 1.0 291. C-1. III a上部 珪 0.6

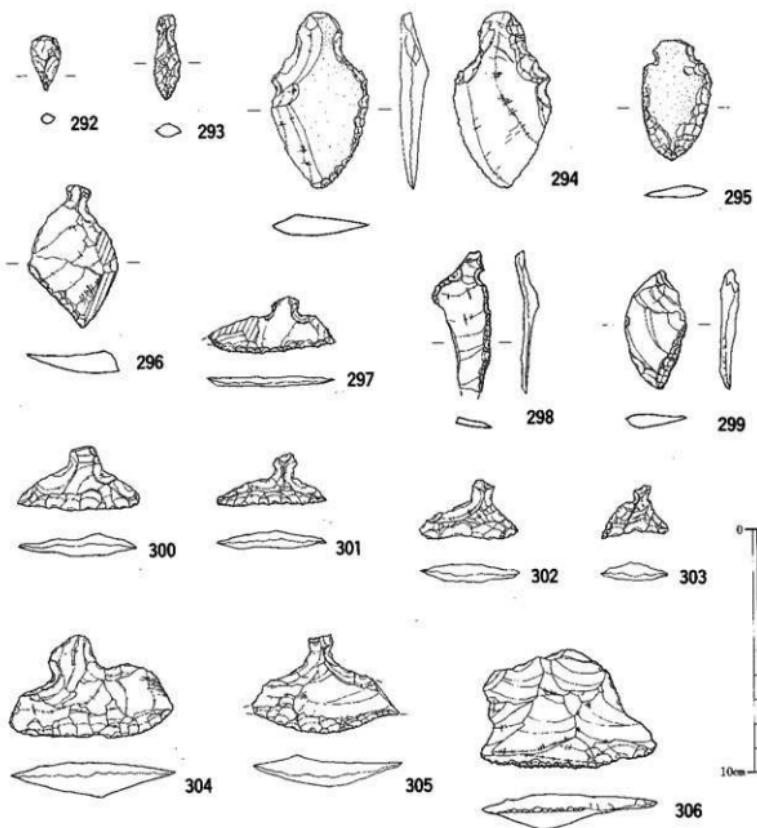


Fig.38 石器実測図 (5) (1/2)

石器石材・重量

292. B-2. I 珪 1.3 293. C-1. III a 頁 2.0 294. C-1. III a 流紋 28.2 295.
C-2. III b 流紋 7.4 296. C-2. III a 珪 14.9 297. C-2. III a 珪 4.3 298. C-
2. III a 流紋 5.1 299. C-1. III a 珪 7.1 300. C-1. III a 珪 8.9 301. C-1.
III a 頁 4.5 302. A-6. 姫島黒曜 4.9 303. C-2. III a 石英 2.7 304. C-1. III
a 流紋 29.2 305. C-1. III a 流紋? 16.3 306. C-1. III a 流紋? 38.5

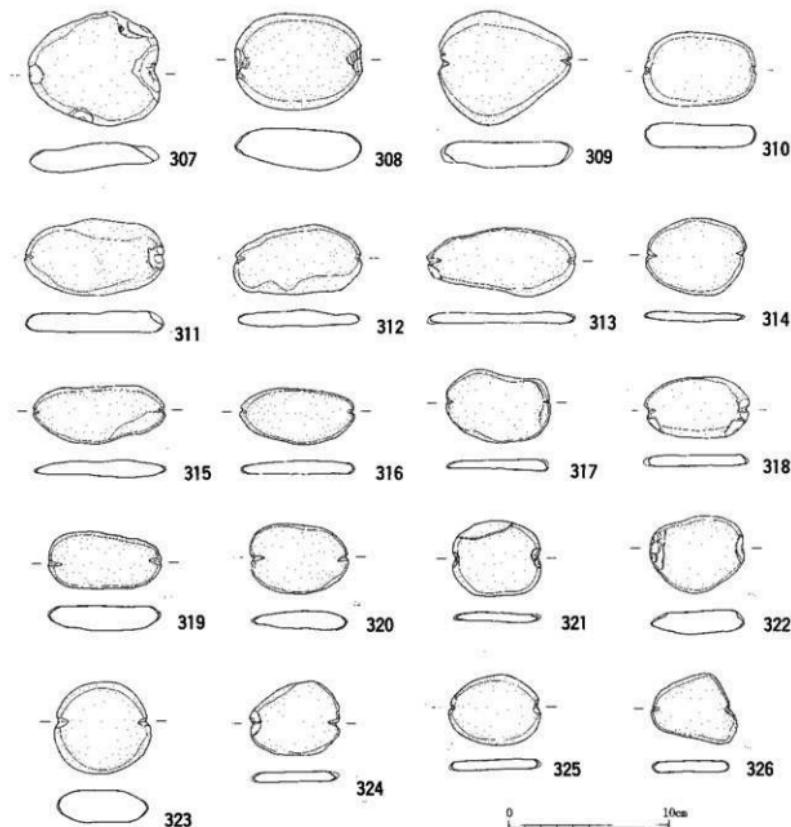


Fig.39 石器実測図 (6) (1/3)

石器石材・重量

307. C-2. I 砂(赤化) 112.0 308. B-2. IIIa上部 頁 175.0 309. C-2. IIIa
砂(赤化) 137.0 310. C-1. II 頁 76.9 311. C-2 I 頁 83.5 312. B-1. IIIa
頁(赤化) 58.5 313. C-2. IIIa 頁 44.1 314. S14 頁 31.2 315. C-1. IIIa上部
頁 44.9 316. C-2. IIIa 頁 32.8 317. B-1. IIIa 頁 37.0 318. C-2. IIIa 頁
32.6 319. A-2. IIIa 頁 62.1 320. C-1. IIIa 頁 44.1 321. B-2. IIIa 頁 28.1
322. C-1. IIIa 頁 57.2 323. B-1. IIIa 頁 101.0 324. B-2. I 頁 24.3 325.
C-2. IIIa 24.9 326. B-1. IIIa 頁 24.4

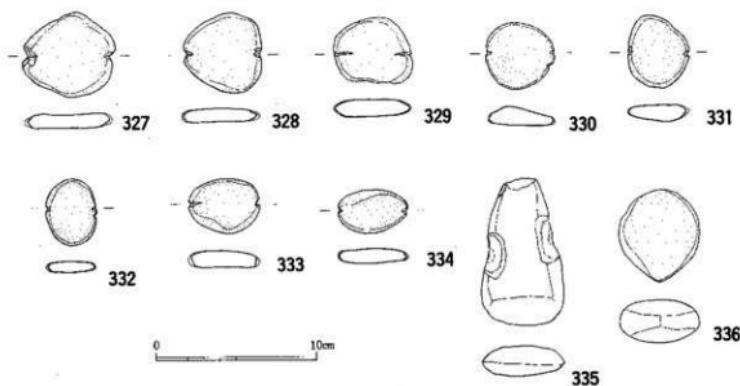
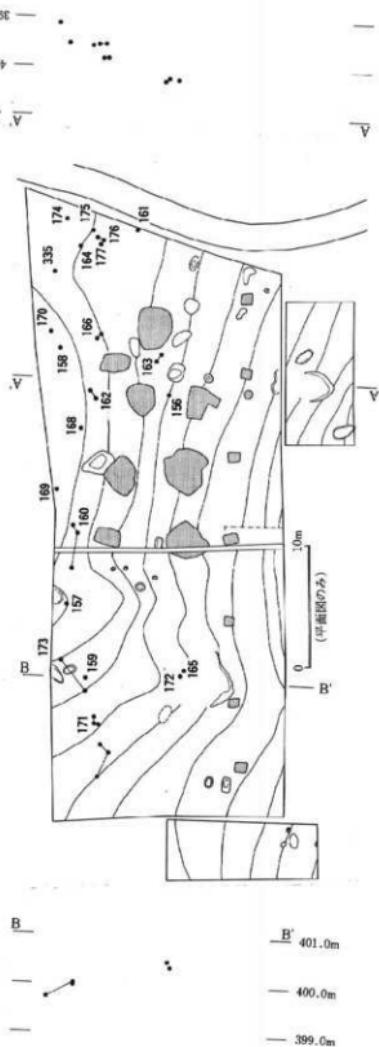


Fig.40 石器実測図(7)(1/3)

石器石材・重量

327. S I 4. 頁 37.4 328. C-2. III a 頁 32.6 329. B-1. III a 32.9 330. B-2.
III a 頁 26.5 331. C-1. III a上部 頁 22.1 332. C-2. III a 頁? 16.0 333. C-
4. III a 頁 23.3 334. C-2. III a 頁 13.9 335. C-1. III a 頁 119.5 336. B-
5. I 頁 115.6

Fig.41 包含層出土土器・石器の出土位置 (平面図 1/400) (垂面図 1/100)



第Ⅲ章 まとめ

第1節 概括

本遺跡は調査の結果、間欠期はあるものの縄文時代早期から弥生時代前期に至る長い期間にわたって営まれた遺跡であることが判明した。中でも中心となる時期は縄文時代中期である。遺跡の範囲は小段丘のほぼ全城に及ぶと推測され、さらに今回の調査区の南側にも広がっていたと見られる。

主たる遺物包含層と捉えられるのは鬼界アカホヤ火山灰を母胎とするⅢ層である。より土壤化の進んだⅢa層と、プライマリーに近いⅢb層に細分されるが、縄文時代後期、弥生時代の土器がⅢb層から出土していない、ということ以外に土器様式と出土層との関係で特筆すべき点はない。

第2節 特徴的な遺構・遺物

(1) 穴住居跡

長方形プランのものが1基検出された。床面のほぼ直上の位置から出土した土器は、いずれも文様がなく、特徴をつかみにくいが、おおよそ縄文時代後期前半あたりの在地系深鉢と考えられる。そうであれば、縄文時代後期前半の竪穴住居跡は方形プランが卓越するという前追亮一氏の指摘¹と合致する。

(2) 脇穴遺構

2基検出されている。土坑の床面に、杭を立てるための掘り形と見られる小穴が存在する。中にはV～VII層土起源の大きなブロックを含む埋め戻し土がつまっていた。2号土坑の方は、「主穴」、「副穴」と称した2つの下場のある変則型のものである。

遺構配置の全容については、2基のみの検出であるため推測の域を出ないが、標高のより高い南側に向かって分布範囲のびていく、「列配置」²であった可能性を考えておきたい。猪など川の方向に下りていく「道」を狙ったものであろう。

構築時期は、決定のための大きな指標となるべき土器片が検出面近くのレベルに見られたことから、それらの遺構が廃絶後短期間のうちに埋め戻されたと見るか、自然に埋没したと見るかで結論が違ってくる。前者の場合は当然、縄文時代中期に構築されたと見るべきであり、後者の場合は、土器片は遺構埋没後のⅢa層形成時にもたされたもので、存続時期は縄文時代中期を有する可能性もでてくる。覆土の断面観察の結果では、いずれとも断定できなかった。

(3) 集石遺構

遺構番号を付した5基以外にも、少なくとも5ヵ所の赤化礫集積箇所が存在したが、敷石を有する構造のものは5号集石の1基のみである。

それらの遺構も、詳細な時期比定は難しい。おおよそ、Ⅲ層出土土器の状況から縄文時代中期を中心とする時期が与えられるに過ぎない。2号集石内には轟式土器片が混在しており、縄文時代前期と推定できるが、この2号集石は先に触れた通り、通常の焼砾集積遺構とは異なるものである。

(4) 土器 一中期土器を中心として

第Ⅱ章での土器の分類は、文様構成を主眼において行っており、型式分類とは異なるものである。また、出土状況の制約により、セット関係の把握や前後関係の追求は困難となっている。

第3類とした一群、および2号集石付近出土土器は、轟B式とされているので、縦位・斜位の突帯を

付す個体や、胴部を屈曲させる個体が見られる点が特徴である。横方向に巡る突帯は比較的間隔が広い。

第5類・第6類は曾畠式に先行する段階の資料であろう。29~31など、微細な突帯を巡らせるものはいわゆる阿多V類土器⁹との関連が指摘できる。胎土中に滑石を混入させる個体も認められる。第7類は曾畠式である。横方向の区画沈線の比較的明瞭な、古い段階に属するものも含まれる。第8類は2本単位の平行沈線文を施す轟D式¹⁰である。

第9類とした連点文系土器のうち、46は（断定はできないが）貝殻による連点文を施すものである。かつて日本山式と呼ばれた一群に対比できよう¹¹。47は口縁部付近のみに連点文を施しており、若干異彩を放っている。

第10類～第13類はキャリバー形の口縁部を特徴とするもので、瀬戸内地域の船元式系の土器やその南九州の地域様式とも言える春日式に近い一群と考えられる。今回の報告では文様要素によりそれらを分類したしたが、口縁部形態などの器形の特徴や、施文部位なども加味したさらなる細分や、先後関係の追求の必要なことは言うまでもない。春日式の編年研究を行った東和幸氏によれば、口縁部形態は内湾するもの（今回の分類のa）からほぼ直行するもの（c）へと、また施文部位は器面全面施文のものから口縁部のみのものへと変化していくとい¹²。全容の判明する個体が少なく、施文部位については確定的なことは言えないものの、口縁部形態を見る限りにおいては、本遺跡の第10類～第13類土器は、ある時期幅を持った一群と見た方が良さそうである。

これに近似する特徴を有する資料としては、鹿児島県松山町・前谷遺跡出土土器¹³や宮崎県高鍋町・大戸ノ口第2遺跡出土土器¹⁴を挙げることができよう。前谷遺跡では里木II式が出土しており、この「前谷段階」は概ね船元IV式・里木II式と並行関係にあるとい。報告中では春日式と、縄文、撫糸文を施す土器群とを別類の外来土器として扱っている。大戸ノ口第2遺跡では、条痕を地文とし、突帯や沈線文などを施す春日式に属するものと、地文として縄文、撫糸文を施すものが見られ、それらについ

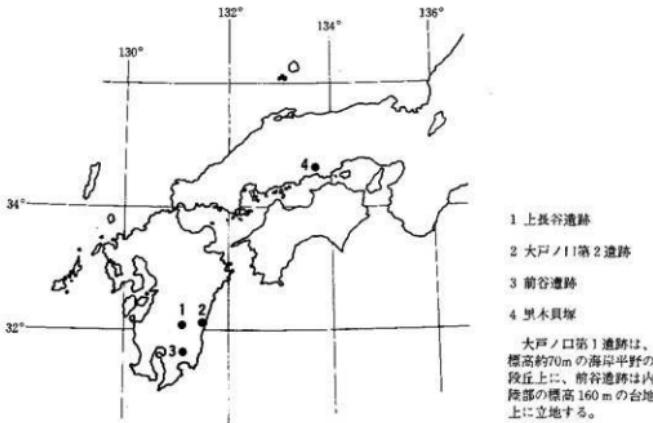


Fig.42 主要遺跡の位置

て「在地化した船元式系の土器群であり、春日式に共通したものもみられる」としている。春日式という地域様式を認識するか、ある遺跡の該期の土器の総体を「在地化した船元式系」と理解するかという違いは、両遺跡の地理的位置が念頭に置かれているようであり（Fig.42）、現象面としては地文に縄文、撫糸文を施す個体がどの程度存在するか、あるいは、在地の土器と内面調整や胎土が違うのかどうか、といった点が論拠となっているようである。

本遺跡においても縄文、撫糸文を施す一群は多く見られるが、（あくまでも肉眼観察による所見であるが）胎土などの見かけの特徴は他のものと変わることろはなく、いわゆる搬入品とは認めがたい。比率を見てみると、縄文、撫糸文を施す個体数：総個体数 = 1 : 3.1（口縁部のみを取り上げている。総サンプル数125）となる。

南九州の伝統にはない、おそらく瀬戸内地域を直接の発信地とする縄文施文の手法が、どの時期・段階にもたらされたかという問題は、難問と言ふべきであろう。本遺跡の資料でも解明のできるものではない。宮崎県田野町・天神河内第1造構のIV層など、在地系土器とともに船元I式・II式が出土している例が少ないのであることから、その段階あたりに推測することも可能とも思えるが、一方で、桑畑光博氏が想定するように、本遺跡の第9類や深浦式と呼ばれる一群が縄文時代中期初頭～中期前葉の瀬戸内地系土器（船元I式・II式）と共に伴するとするならば¹⁰、第10類～第13類に認められる外来系要素の流入という現象は、並行関係にある船元IV式・里木II式からダイレクトにもたらされた結果とも考えよう。それらの当否については早晚結論が導き出せる状況には無さそうであり、また、外来系要素の流入に際して、いかなる背景がそこにあったかという点についても同様である。

いずれにしても、ここでは縄文、撫糸文を施す土器についても、当地域の該期の日常容器のセットを構成する一要素であるとの捉え方をしておきたい。そしてそれらがどの程度の割合で存在したのかという点をつきとめていくことが重要となってくるであろう。南九州の各小地域（例えば「大隅半島地域」とか「宮崎県山間部」といった範囲）ごとの土器相の把握や、ひいては春日式の理解のために有益であると考えるからである。

第14類とした外反口縁の無文土器は、縄文時代後期の初頭から前葉あたりに位置づけられるものか。後期の土器としては、他に出水式、西平式の系統のものが少量認められる。

（5）石器

石鎚や石錐といった食料獲得のための石器の出土量が注目される。また、それに対して磨石・石皿といった植物調理用の石器や石斧などの、生活関連の石器が少ないことも指摘できる。おのずと本遺跡の性格が浮かび上がってこよう。

（註）

1. 前追 売一 1991 「縄文時代の堅穴住居－鹿児島県本土発見の資料集成－」『南九州縄文通信』 5
2. 稲田 孝司 1993 「西日本の縄文時代落し穴窓」『論究考古学』 天山舎
3. 金峰町教育委員会 1978 「阿多貝塚」
4. 水ノ江和同 1990 「中・南九州の曾畠式土器」『肥後考古』 7 肥後考古学会
5. 猪口清之・乙益重隆 1938 「鹿児島県加治木町日本山洞窟遺跡の研究」『史前学雑誌』 10-2
6. 東 和幸 1989 「春日式土器の型式組列」『鹿児島県考古』 23 鹿児島県考古学会
7. 東 和幸 1991 「鹿児島県における縄文中期の様相」『南九州縄文通信』 5 南九州縄文研究会
8. 松山町教育委員会 1986 「前谷貝塚」
9. 高鍋町教育委員会 1991 「大戸ノ口第2遺跡」
10. 宮崎県教育委員会 1991 「天神河内第1遺跡」
11. 桑畑 光博 1993 「南部九州における縄文時代前期末から中期前葉の土器について」『鹿児島県考古』 27 鹿児島県考古学会

報告書抄録

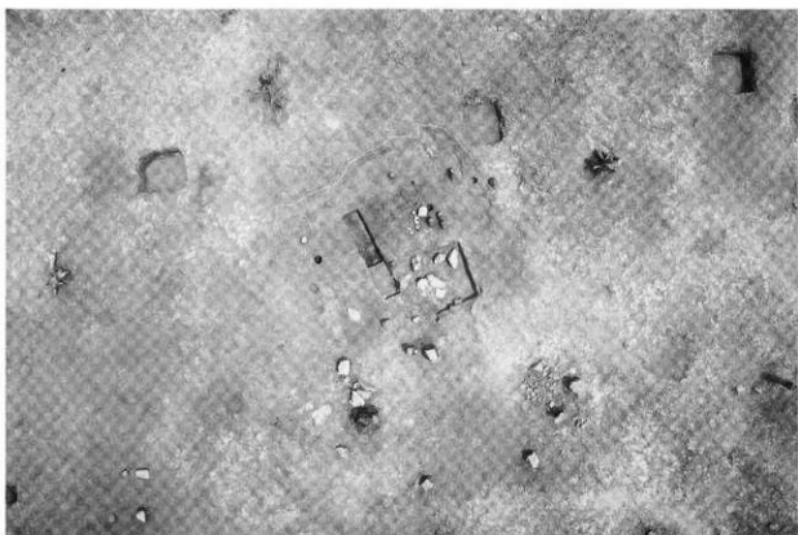
フリガナ	ウエチョダニ
書名	上長谷遺跡
卷次	——
シリーズ名	須木村文化財調査報告書
シリーズ番号	第3集
編集者名	吉本 正典
発行機関	須木村教育委員会
所在地	宮崎県西諸県郡須木村大字中原1741-1
発行年月日	1995年3月31日

所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ウエチョダニ 上長谷遺跡	須木村大字下田 字上長谷	32°3'10"	131°5'30"	920409 ～ 920611	1,050m ²	し尿処理 場建設
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
集落跡	縄文時代	竪穴住居跡・ 土坑・集石	縄文土器・ 石器		土坑のうち2基は陥 し穴か。	

PL.1



調査区全景（上空より）



1号竪穴住居跡周辺（上空より）



B・C-1・2区の状況（南東より）

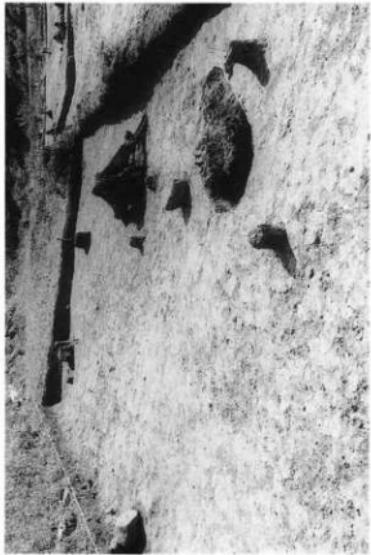


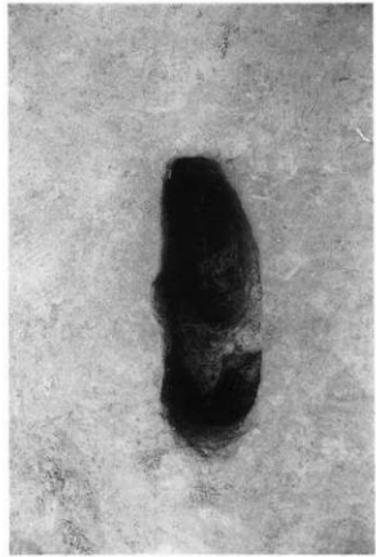
B-3区南西壁層位



1号壁穴住居跡（北より）

1号壁穴住居層土層（北より）





2号小穴（北より）



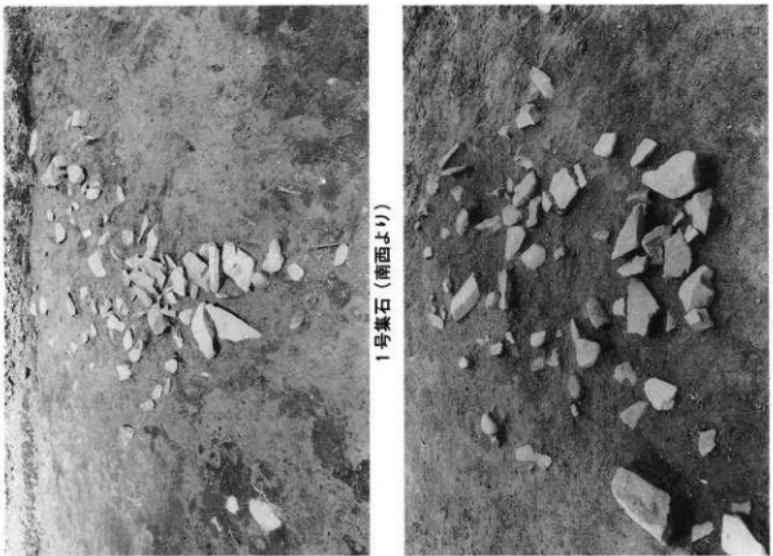
C—1区跡発出作業状況（南西より）



1号集石（南西より）



2号集石（北東より）



3号集石（北東より）

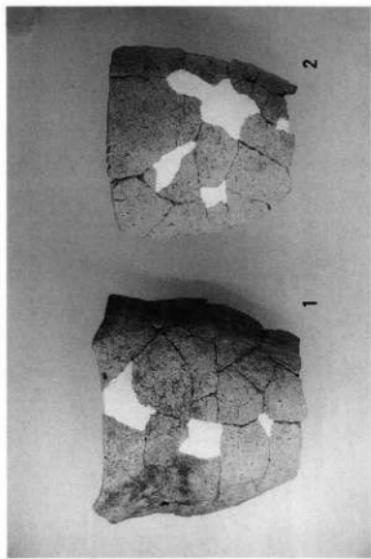
PL.6



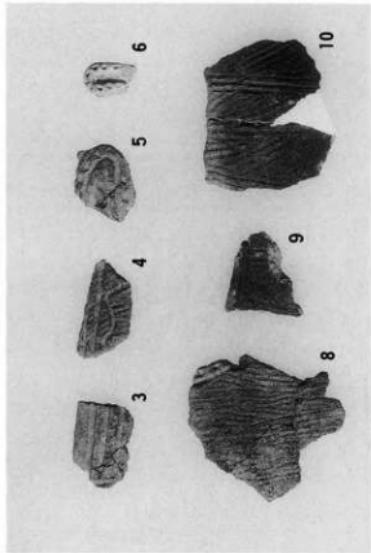
4号集石（南西より）



5号集石（北東より）

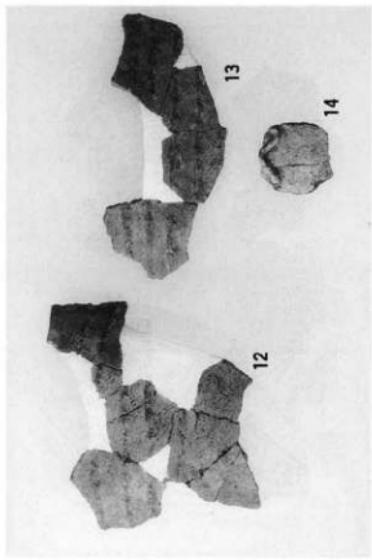


1号堅六住居跡出土土器

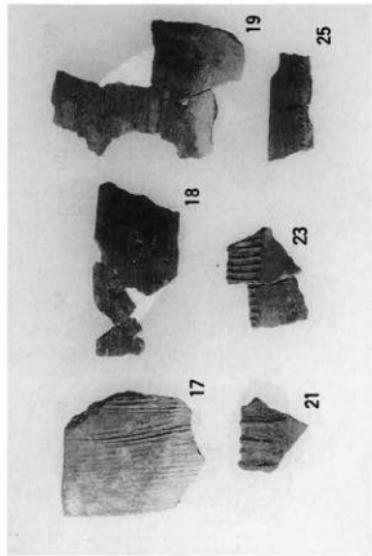


5号集石（北東より）

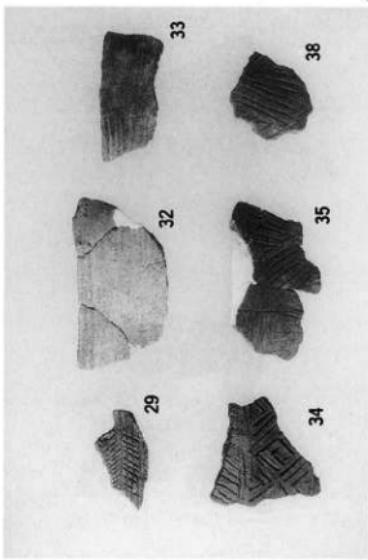
PL.7



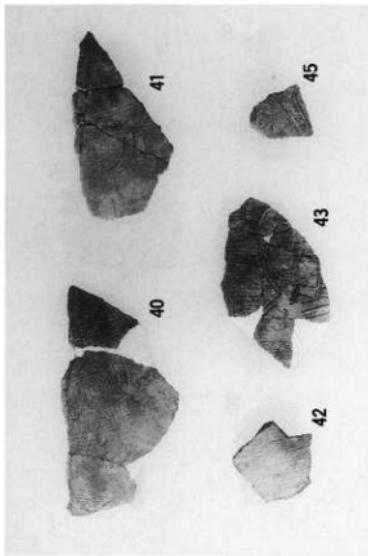
集石付近出土土器



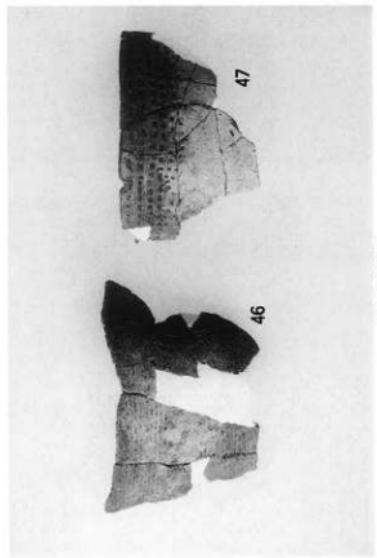
第2類・第3類土器



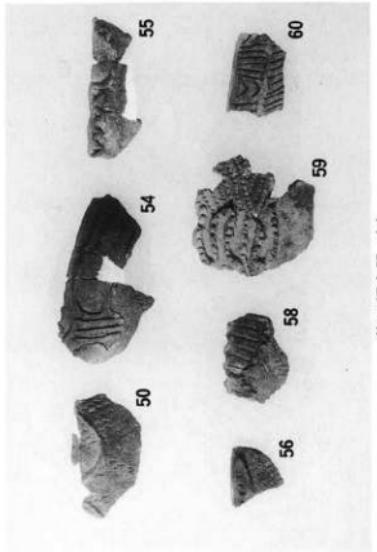
第5類～第7類土器



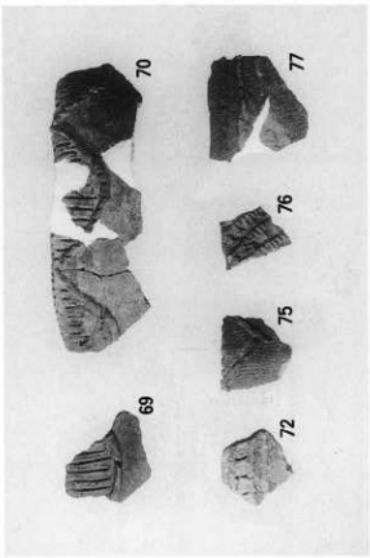
第8類土器



第9類土器



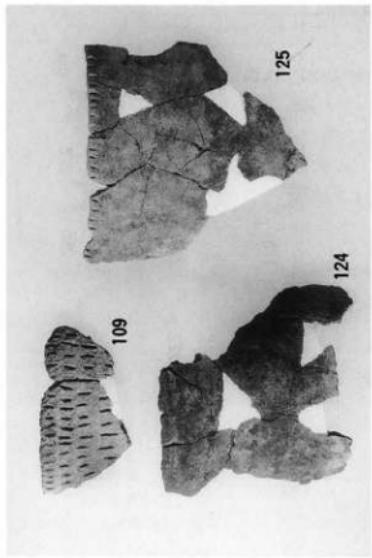
第10類土器 (1)



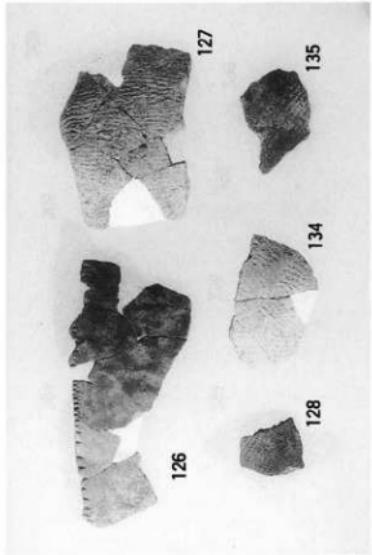
第10類土器 (2)

第10類・第11類土器

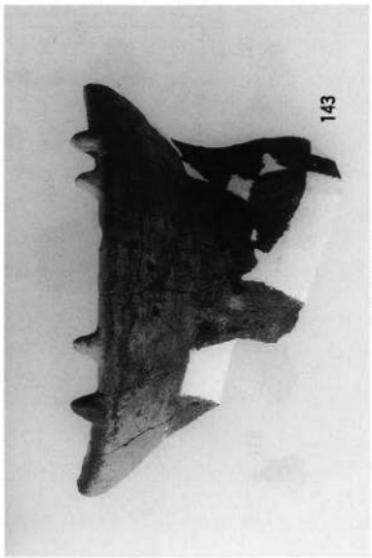
PL.9



第11類・第12類土器

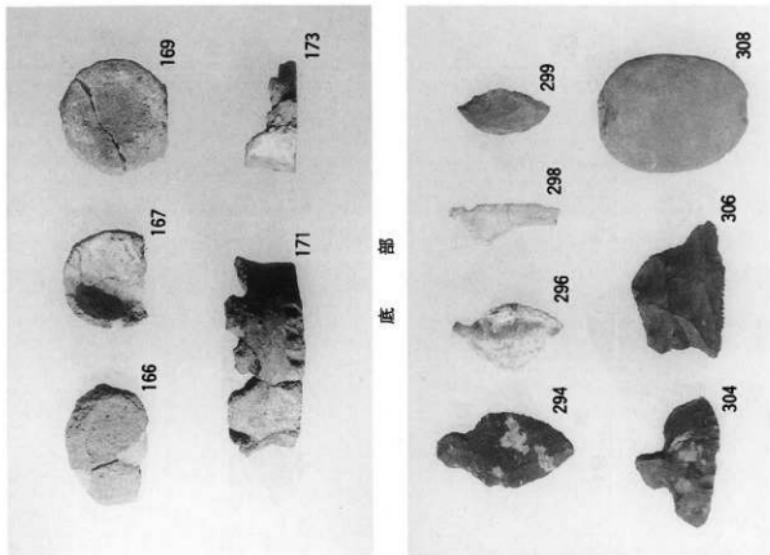
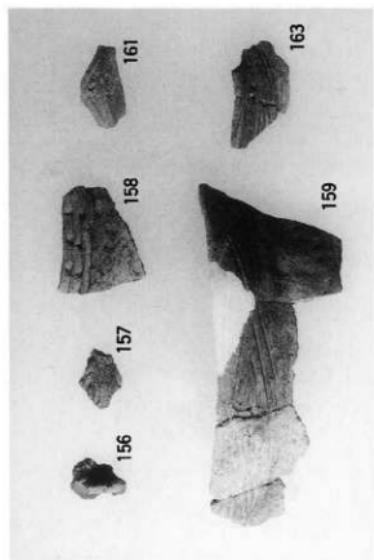


第12類・第13類土器



第13類土器

第13類土器～第15類土器



須木村文化財調査報告書 第3集

上長谷遺跡

1995年3月31日

発行 須木村教育委員会

宮崎県須木村大字中原1741-1

印刷 (有)印刷センタークロダ

宮崎市大橋2丁目175番地